

まなぶ系譜、紡ぐ。

甲府第一高等学校創立130周年記念誌



2010年現在の登校風景

甲府第一高等学校創立130周年記念誌

山梨県立甲府中学校校歌

三井甲之作詞 / 東京高等音楽学院 (榊原直) 作詞

昭和3年2月20日制定

- 一、我等は日本に生まれたり
神の御代より一系の
皇統戴く我が国に
生まれしことのうれしさよ
皇國の榮えは天地と
共に窮りなかるべし
- 二、大和島根に山めぐる
甲斐の国あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め軽からず
見よや南に富士ヶ嶺は
皇國の鎮めと聳えたり
- 三、大海原の揺りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇國を諸共に
國民挙りて國のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる

山梨県立甲府第一高等学校校歌

上條 馨 作詞 / 小松 清 作曲

昭和23年10月22日制定

- 一、甲斐の国 み中に建ちて
古へゆ 雄心伝へ
新しき 世の鑑とし
勉めてむ この学舎に
- 二、日に新た また日に新た
弥高き のぞみをもちて
真なる 理究め
励みなむ 若人我等
- 三、聳え立つ 芙蓉の高根
清き哉 甲斐の山川
もろともに 玉と磨きて
賛くべし 天地の化育

応援歌

「鶴城に」

作詞、作曲不詳

一、鶴城に桜花咲き

人は皆歓楽に酔ふ

われ一人落花を浴びて

前の恥花園に泣きぬ

二、秋来る健児の胸に

強き意気宇宙も空し

桜花の旗ひとたび振れば

醜の群れ微塵に飛ばむ

ヤッツケロ ヤッツケロ

ヤッツケ ヤッツケ ヤッツケロ

「希望の光」

作詞、作曲不詳

一、希望の光 身に浴びて

若人の意気負うて立つ

今選手等の門出を

空もどろに 応ふらん

二、敵軍いかに 猛くとも

忍び伏せたる梓弓

鍛えし腕引きしほり

敵のかぶとを 射落さん

三、見よ穹天の 雲は垂れ

覇権を握るは今なるぞ

蛟竜の意気胸に秘め

いざや起て起て わが選手

「起て撃て勝て」

足立市朗作詞・作曲
昭和27年

起て撃て勝て

甲府一高 一高

その名ぞ我が母校

仰ぐ芙蓉の峰さやか

穹天まさに轟かむ

見よ精鋭の集えるを

結べる眉に必勝の

誓いは堅し我等が精鋭

おお

起て撃て勝て

甲府一高 一高

その名ぞ我が母校



第 36 代 校長
跡部 和

平成 20 年 5 月、望月政男同窓会長を会長とする「創立 130 周年記念事業協賛会」が組織され、同年 6 月、第 1 回記念事業協賛会役員会が開催されました。以来、平成 22 年 9 月まで 13 回の記念事業協賛会役員会を経て、一連の創立 130 周年記念事業が計画・実施されました。マイクロバスの更新に始まり、自習室の新設、HP 更新、資料展示コーナー開設、日新基金新設、記念式典・演奏会開催と続き、この記念誌刊行ですべての記念事業が完成いたします。

しかし、これらの事業は完成をもって終了ではなく、むしろこれから効力を発揮し始める事業です。マイクロバスは部活動等の活性化のために、自習室は校内勉強部屋として学力向上のために、HP は広報活動の要として、資料展示は自信と誇りの源として、日新基金は創造的活動のモチベーション向上のために、記念式典・演奏会そして記念誌は 130 年の集大成とともに次の 10 年への飛躍の礎として、それぞれが本校及び本校生に対し、物理的にも心理的にも大きな効果をもたらし続けることでしょう。同窓会の皆様、PTA の皆様を始め、ご尽力頂いた皆様には、このような先見性と実効性をもった数々の事業を展開していただき、本当に有難うございました。

本校は、現在「文化の香りのする懐の深い進学校」を合言葉に、「学力向上事業 F21」の展開を始め、文化、芸術、スポーツ活動の活性化を推進しておりますが、記念事業を追い風に、今後さらに、本県を代表する高校として、各分野においてフラッグシップの役割を果たすとともに、地域、国家、世界のために役立つ人材の育成に力を注いでいく所存であります。

130 周年記念事業にご協力いただいた皆様に重ねて感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げます。記念誌刊行のご挨拶といたします。



第 21 代同窓会長

望月政男

母校甲府一高が、創立 130 周年を迎えられたことを心からお慶びお祝い申し上げます。

130 周年という長い歴史のなかで、本校を築き支えてこられました多くの関係各位に心からお礼申し上げます。本校はこの永い歴史の中で、卒業生も 3 万人余をこえ、各界に多くの人材を輩出し現在も国内外で大勢の卒業生が活躍しておられます。同窓会は、PTA、教職員の協力をえて協賛会を組織し、全国にいる同窓生 2 万 2 千人、一人一人に募金を呼びかけました。現下のきわめて厳しい経済環境のなかにもかかわらず、全国の大勢の同窓生から募金が寄せられ、それに PTA、先生方のご協力を得て、目標を大幅に上回ることができました。母校を想う同窓生の志の高さ、母校愛に心をうたれました。本当にありがとうございます。

記念事業も「ハードな事業」はやめて、生徒に「夢と希望」を与えるような事業にしました。母校には『Be Ambitious』『Be Gentleman』という、すばらしい校是があります。政治も経済も閉塞感につつまれ、うつむき加減の今の日本にあって、「背筋をピンと伸ばし』『志を高くもて』の『Be Ambitious』、法にふれなければ何をしてもよいような風潮の今の日本にあって、「人が見えていても見ていなくてもいつも』『紳士淑女たれ』の『Be Gentleman』の校是は、130 年の歴史に濾過されて、今なお新鮮な、いや今の日本にとって一番必要な指針ではないでしょうか。私はこのような母校に学べたことを誇りに思います。このような『伝統』を作り、受け継いでくれた先輩後輩に敬意を表します。

『伝統とは革新の連続なり』という言葉があります。甲府一高創立 130 周年記念日は、過去を顧みるだけではなく、母校のすばらしい伝統を次の世代につなげるため「日々新たに」変革を誓う日であると思います。

母校の益々の発展と皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。



PTA 会長
佐藤茂樹

本校は、輝かしい歴史と伝統のもと創立130周年を迎え、21世紀に新しい社会を創造するため、山梨に、そして日本にその存在感のある高校を目指し、同窓会・学校・PTAが一体となって質実剛健・自主自立・そして日々新たな精神のもと、新しい一高づくりを強力に推進しています。

平成20年6月6日に第1回目の記念事業協賛会役員会を開催して以来、創立130周年記念事業計画の実現に向けて、望月政男同窓会長を先頭に多くの同窓会の役員・会員の皆様、新津元前校長先生、跡部和現校長先生を始め全ての学校教職員の皆様、PTAでは平成20年度斉藤義一元会長、21年度西山正盛前会長、他役員・保護者の皆様には、格別なるご支援・ご協力を賜りました。

協賛会の役員の皆様は、県内は元より、広く全国に展開・活躍されている同窓生への協賛金を集めるために奔走され、同窓生の皆様も快く応じていただき、貴重なご芳志をいただいております。この場をお借りいたしまして、心から深く感謝を申し上げ、また厚く御礼を申し上げます。

これまで同記念事業といたしましては、平成21年8月には冷暖房・防音完備の自習室が北館校舎内に完成、同年11月にはクラブ活動等の送迎用のマイクロバスの導入がなされました。また、平成22年のPTA総会の席上では、多くの会員の皆様の賛同を得て、PTAとしても協賛金への協力・上積みが図られ、稀に見る猛暑日多発の中、生徒たちが集中して勉強が出来るよう、熱中症対策のエアコンの導入が出来、何よりも子ども達にとりまして、より快適な教育環境の整備をさせていただきました。130周年記念事業に携わられました全ての皆様に対しまして、全県一学区の中、生徒自らが甲府一高を希望し、甲府一高で就学の機会を与えられた在校生の保護者を代表いたしまして、重ねて心から厚く御礼を申し上げます。

結びに、この先本校は、更に多くの有為な人材を輩出して発展し、時を重ねていくことと存じますが、甲府一高で学んだこと、特に強行遠足での貴重な経験は、同窓生や在校生にとりまして、この先いつまでも自信や誇り、そしてバネとなって、必ずや心に残っていくと確信をいたしております。

母校甲府一高の益々の発展をご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



生徒自治会長
古屋ゆい

甲府第一高等学校の歩んできた 130 年という年月は、私たちには想像もつかないほど長い時間であり、その中にはたくさんの歴史や皆様の思いが詰まっていることでしょう。そしてこの記念すべき創立 130 周年の年に、一高生であることを、誇らしく、また嬉しく思います。

これまでに甲府一高を卒業なされた一人ひとりの先輩の皆様のお力で、本校は文化の香り高い、県内随一の伝統校として、今も県下にその名が知れ渡っています。私たちは学校生活の様々な場面で伝統の重さを感じています。その伝統を受け継ぎ、さらに新しい力で進化させていくことが、私たち在校生の大きな役割だと強く思います。

10 月 9 日、10 日に私たちは強行遠足を無事に終えました。たくさんの方のご協力に支えられ、一人ひとりが自分の限界に挑みました。130 年の伝統に支えられていることを実感し、日常では得られない貴重な体験ができました。この経験は、これから先の人生で待っているであろう、厳しい困難をも乗り越えていく自信と勇気を私たちに与えてくれました。

また、130 周年を迎えるにあたって多くの同窓生や保護者の皆様のご厚志により、私たちの独創性を育むための日新基金や、個別に集中して勉強できる自習室の新設、多くの部が利用できるマイクロバスの購入などをしていただきました。どれも私たちの学校生活をより充実したものにしてくれています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私たちはやがてこの甲府一高を卒業し、それぞれの道を歩んで行きますが、130 年という歴史の重みをしっかり受け止め、伝統の心を受け継ぎ、甲府一高のさらなる発展のために努力していくことをお約束し、ご挨拶とさせていただきます。

甲府第一
高等学校の
いま



学校とは感情の結晶体である。

若人は夢を語り、自らを磨く、

時に己の無知を知り、

時に謙虚さや学識を得る。

世代や人間が入れ替わろうとも

『日々新たに』。



















ぐ る 旅



130年をめぐ

130年の歴史の中には、
各時代に生きてきた人々の思い、
願い、希望がありました。

130年間という時間の中で育まれた宝物は、
長い歲月の中で糸を紡ぐように

一つひとつ大切に育てられてきました。

今、社会に出て活躍している多くの一高人が、

「一高生だから」と誇れる何かが

これから紹介する第1期〜第5期には詰まっています。

「出る杭は打たれる」と言いますが、

一高生は「出た杭をさらに磨く」そんな卒業生ばかり。

石橋湛山が記した

「Boys, be Ambitious!」という文字には、

個性、個人を尊重する一高魂が表れています。

1880-1905

第1期

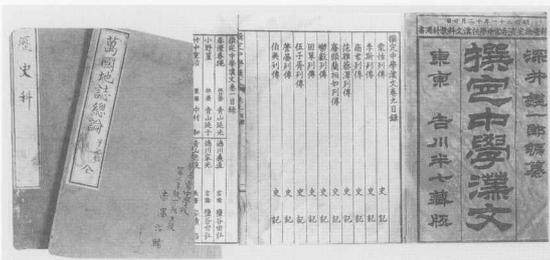
甲府市錦町（現中央一丁目）に山梨県師範学校の校舎竣工。

これが今に続く甲府第一高等学校の始まりです。

明治13年（1880）には、山梨県中学校規則を制定し、中学校を師範学校内に併設。10月23日に開校式をしました。開校から校名の変遷を経て山梨県立甲府中学校になるまでの25年間は、現在まで続く一高魂の基礎を築き上げた時代でした。



明治9年（1876）に建てられた徴典館。この建物は同16年（1883）には焼失。その後、17年には新しい徴典館が建てられた。いずれも当時の県令（知事）藤村紫朗が推奨した擬洋風建築。当時の絵地図を見ると甲府の街にはこのような擬洋風建築が建ち並んでいた。



山梨県尋常中学校の教科書



明治20年（1887）に師範学校女教場を改築して山梨県尋常中学校の校舎にした。



5代 黒川 雲登



4代 村上 孚光



3代 長倉 雄平



2代 平井 正



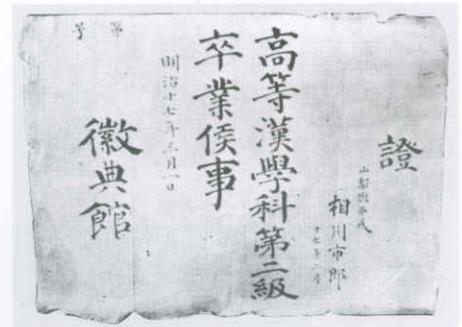
初代 吉田 義静

第1期 歴代校長

甲府一高魂のはじまり



県立山梨県中学校の卒業写真。(明治34年/1901)
この年錦町の分教場に山梨県第二中学校が設立されたので、名前を第一中学校と改めた。



徴典館高等漢学科卒業証書。
徴典館には、医学科、漢学科などの学科があった。



山梨県尋常中学校時代から続く「校友会雑誌」。強行邁足の創始者、江口俊博先生は、甲府中学校に赴任した翌年の大正13年(1924)の「校友会雑誌(第47号)」の中で、「学校を活かすのは校友会だと思ふ。学校の教育を実地に動かしてみる実験室は、校友会だと思っている。」と書いている。



甲府城の中にあった甲府中学校の正門。
甲府中学校には、山梨県中から生徒が集まってきた。



授業料の領収書。当時、月謝は2円だった。(明治41年/1908)



尋常中学校時代の校章



徴典館時代の校章



7代 大島 正健



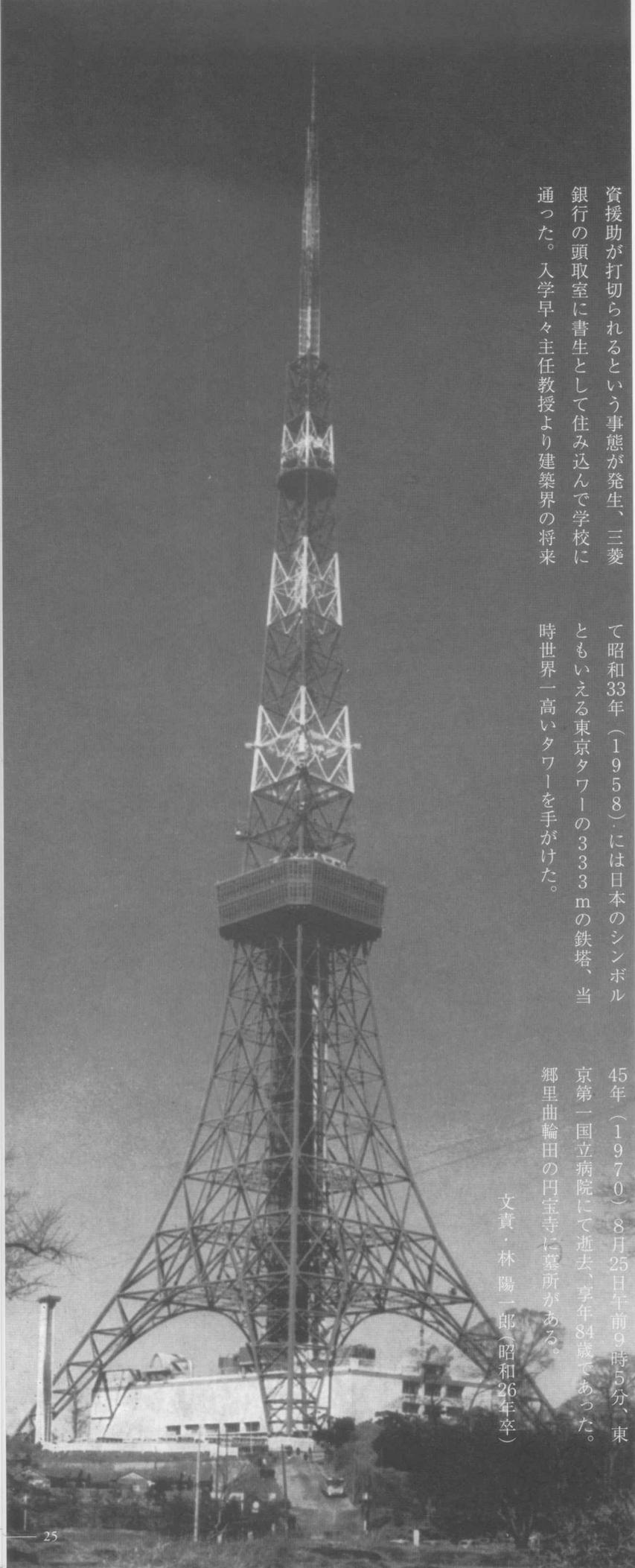
6代 幣原 坦



夢を叶えるもの - 内藤多仲 -

わが国の耐震建築、鉄塔建築など建築界に多くの業績をあげた内藤多仲は、明治19年（1886）6月12日、中巨摩郡榑形町曲輪田（現南アルプス市）の内藤小四郎の長男として生まれた。内藤家は地元では格式のある名家として知られ、多仲の母は隣村の落合村（旧甲西町、現南アルプス市）の旧家新津家から内藤家へ嫁いで来ている。このような旧家であった内藤家ではあるが、多仲の祖父の代に火事に遭い、その家計は苦しかったといわれている。

そのような状況の中で多仲は家の百姓仕事を手伝いながら、小学校、高等小学校の学業を終えて明治32年（1899）に甲府中学校に入学する。当時は山梨県中学校と呼ばれていた。実家の曲輪田からの通学は厳しかったので御勅使川沿いの多之岡（旧八田村、現南アルプス市）の親戚石丸家から通学した。同年6月には母の死にあい、一家は甲府の東光寺町の借家に移るといふ事態となるが多仲は級長になるなど勉学に励んだ。当時の校長は幣原坦、また中学2年の時には大島正健で、二代にわたる甲府中学の名校長のもとで過ごした。また多仲より2年後輩には後に首相となった石橋湛山が在学中であった。多仲の同級生は54名に推薦会員4名の合計58名で、この中には俳人の飯田蛇笏、郷土史家の赤岡重樹、在学中で陸軍幼年学校や海軍兵学校に合格した4名の推薦会員の中には元陸軍大将であった今村均の名がみえる。また一年上には『少年行』の作家中村星湖がいた。学業成



績は常にトップで学級長を務めた甲府中学から、明治37年（1904）の9月に東京第一高等学校（現東京大学）に合格。学費は母方の伯父が負担してくれることになり勉学を続けることができた。同級生の中で、東京第一高等学校合格者は文科2名、法科1名と多仲の工科1名の計4名であった。東京第一高等学校の学校長は新渡戸稲造であり、多仲は英語を夏目漱石に学んでいる。1、2年は東京第一高等学校寮生活、3年には県出身者学生のための「山梨共修社」に移った。学校制度が変わり、東京帝国大学へと進学したのは明治40年（1907）、日本海戦勝利に貢献した造船科に進学する。この時に伯父からの学

性を語られ、科を造船から建築へと変更し、「建築の内藤」の誕生となった。「耐火建築について」との卒論を提出し、東京帝国大学を卒業。大学院進学の手定を急きよ変更し、早稲田大学へ就職。その後、46年7ヶ月を大学教員として早稲田大学で過ごすこととなる。多仲の業績をあげるには多くの紙面が必要であるが、そのうちから主なるものを並べると、東京歌舞伎座、東京中央郵便局、NHK愛宕山放送鉄塔、早稲田大学大隈講堂、地下鉄上野駅、さらに旧満州国（現中国東北部）の中央銀行、新京ラジオ百米鉄塔、天津火力発電所、松花江発電所の建築を行っている。戦後は広島平和記念堂、大阪通天閣。そして昭和33年（1958）には日本のシンボルともいえる東京タワーの333mの鉄塔、当時世界一高いタワーを手がけた。

生まれ故郷の山梨県内では、大正10年（1921）甲府市役所庁舎の建築を手がけ、昭和30年（1955）山梨県民会館ホール、33年には県民会館、36年山梨県庁舎、43年恵林寺宝物館など数多くの建造物を見る事ができる。

昭和33年（1958）紺綬褒章
 昭和34年（1959）紫綬褒章
 昭和37年（1962）櫛形町名誉町民
 昭和38年（1963）早稲田大学名誉博士
 昭和39年（1964）勲二等旭日重光章

これら数多くの業績をのこした多仲は昭和45年（1970）8月25日午前9時5分、東京第一国立病院にて逝去、享年84歳であった。郷里曲輪田の円宝寺に墓所がある。

文責・林陽一郎（昭和26年卒）

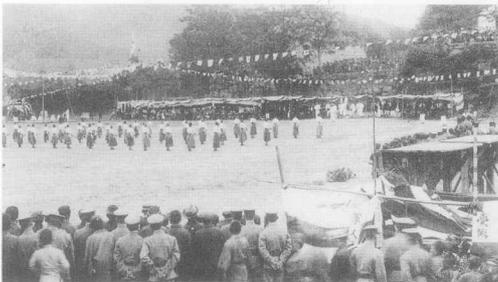
1906-1927

第 2 期

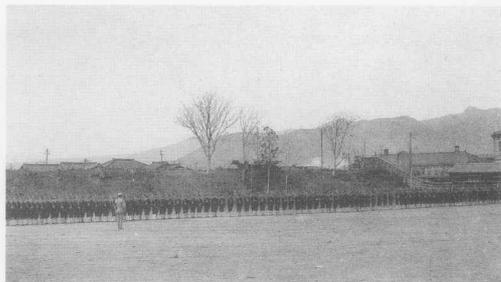
明治 34 年（1901）に県立山梨県第一中学校と改称した後、
明治 39 年（1906）6 月 1 日に山梨県立甲府中学校とさらに改称。
校旗を制定しました。ここから終戦までこの校名が続きます。



寄宿舎の自修室と食堂。当時は校内にあった寄宿舎で寝泊まりし、学校へ通っていた生徒もいた。学校でも寄宿舎でも規則正しい生活が求められていた。



秋季大運動会（大正 8 年）



中隊教練（大正 6 年）



10 代 江口 俊博



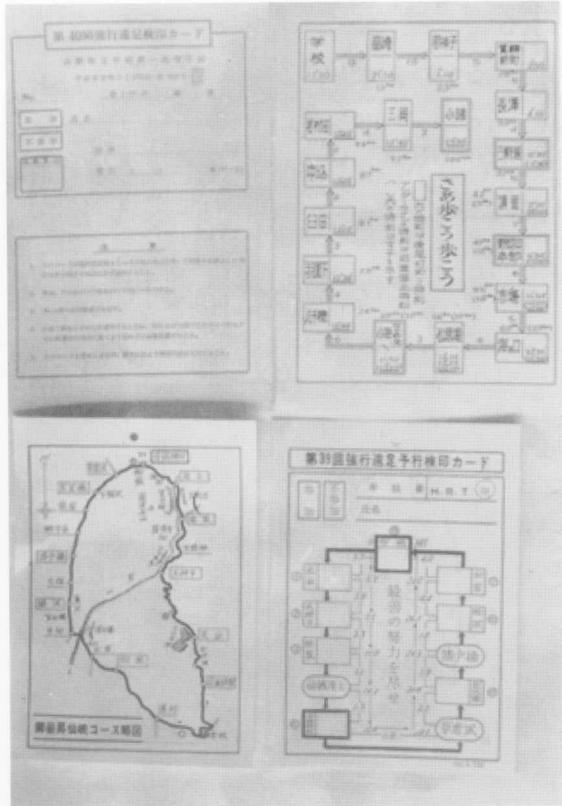
9 代 田村 喜作



8 代 末久 喜十郎

第 2 期 歴代校長

心を鍛えるためには、頑丈な体づくり



大正13年(1924)に第1回強行遠足が始まった。写真は出発風景と検印カード。
カードは学年別に色違いのものが配付された。
検印カードの上段は本番のもので、下段は練習用のもの。

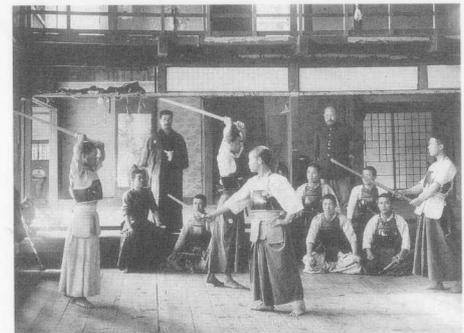
当時の部活動風景。柔道部、弓道部、庭球部、野球部などがあった。角力部、撃剣部は明治時代ならではの部活動。OBの方のお話では「野球部や庭球部に入れるのは、スパイクやグローブ、ラケットなどが買えるお金持ちの家庭の学生だけだった」。そのことを証明するのが、野球部、庭球部と他の部活動の学生の足下。野球部、庭球部の学生は全て革靴。



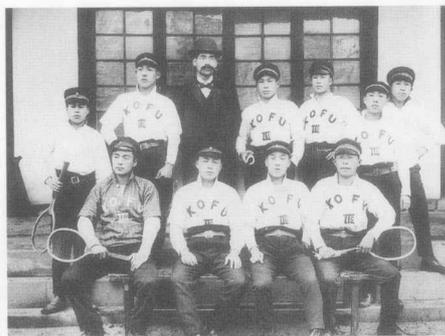
野球部



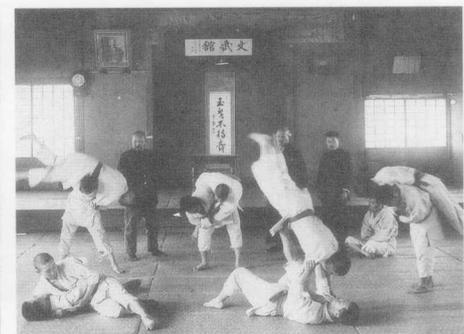
角力部



撃剣部



庭球部



柔道部



保阪嘉内（1915年3月、卒業の時）



大島正健校長（1901～1914年在任）創立30周年記念絵葉書より（明治43年）

「一人前の人間」として — 大島正健校長と保阪嘉内 —

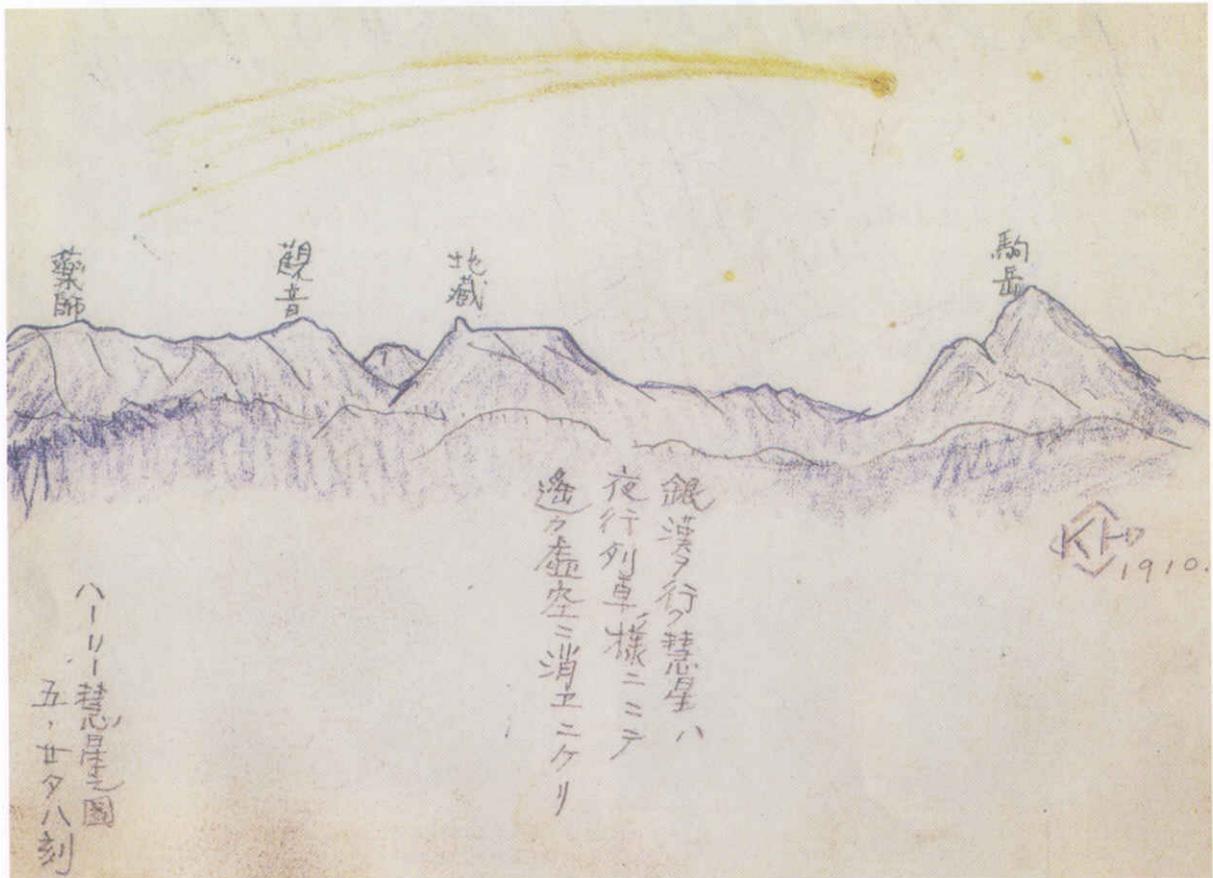
甲府一高の歴史を語るうえで、最も重要な人物の一人、大島正健。大脳生理学者で直木賞作家の木々高太郎（林麟）は随筆「故郷とその中学」の中にこう記す。

「ほかの同年配の人たちの話を聞くと、まるで動物のような（旧制）中学時代を送った人が多いのに、私たちは一人前の人間として扱われてきたということは実にありがたかった。」

明治末期の甲府中学校がこうした校風をかもし出すことができたのは、大島正健校長（第7代）の教育理念に拠るところが大きかった。

大島は同志社普通学校教授、奈良中学校校長を経て、明治34年3月、県知事加藤平四郎の招聘を受けて、県立山梨中学校（39年「甲府中学校」と改称）に着任した。札幌農学校でクラーク博士に薫陶を受けた大島校長は、15年間の在任中、生徒の個性や自治を尊重する、自由主義的かつストイックな教育方針を崩さなかった。校是は唯一「Be Gentleman!（紳士たれ!）」でよいとしたのもその表れだった。

成績不振の知事の子どもを落第させた逸話。明治の元勳・伊藤博文の肖像掲示を「品行の点は師表とするに足りない」として拒否した話。高山樗牛の「滝口入道」を読んでいた生徒を軟弱だと視学官が非難するのを、文学史上価値があると生徒をかばった話。三



嘉内画「ハーリー慧星之図」(1910年5月20日 舞鶴城内寄宿舎から)

里も離れたところから通う生徒宅を自ら徒歩で訪ね、第一高等学校(現東京大学教養部)への進学を説いた話。落第を続けていた後の総理大臣石橋湛山がその人柄に感化された話…。エピソードはおもむくところ、内村鑑三、木下尚江、ニーチェ、シヨールペンハウエル、トルストイ、ドストエフスキーなど、思想上の束縛もなく自由に読書することが許された。

この空気を吸って育った一人が、宮沢賢治との篤い友情で知られる保阪嘉内だ。彼は校内でガリ版刷りの同人誌「巡礼」を創刊したほか、校友会雑誌や弁論大会で「美的百姓」「農業と人」となどの論を展開した。彼の豊かな「花園農村」建設の考えは、すでに甲府中学の時に芽生えていた。盛岡高等農林学校(現岩手大学)で宮沢賢治と出会った時、すでに嘉内の課題意識は強く、賢治ほか周囲に大きな感化を与えた。甲府中学1年の嘉内が舞鶴城内の寄宿舎から観たハーレーすい星(明治43年5月20日)のスケッチと宮沢賢治の『銀河鉄道之夜』の印象とは近似している。嘉内の葦崎の家から見える八ヶ岳連峰の一つに「風の三郎岳」という異名のあったことも決して偶然ではない。

嘉内は、その後、昭和12年42歳という若さで亡くなるまで、ジャーナリストとして活動したほか、農村改善運動、青年教育に尽力した。

文責・福岡哲司(昭和42年卒)

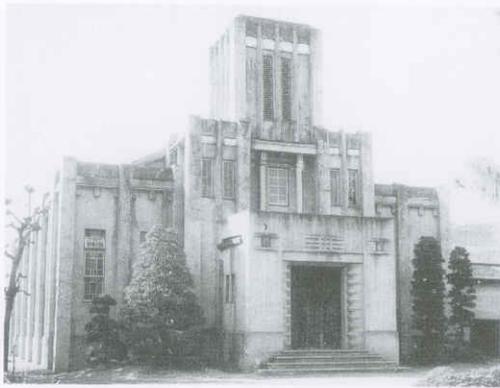
1928-1947

第3期

第3期は、最も大きな変革である、校舎の移転から始まります。

それまで甲府城にあった校舎を現在の甲府市塩部に移しました。昭和3年(1928)7月のことです。

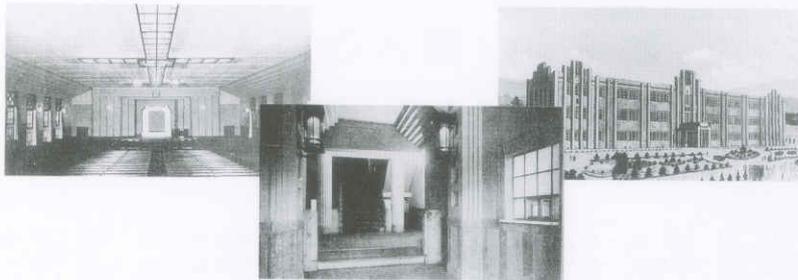
移転の理由としては、山梨県庁舎の拡大と郡役所の廃止に伴う職員の増員により、甲府中学校の校舎跡地に新県庁舎を新築するためだったと記録されています。『百年のあゆみ』



県下一を誇るモダンな建物の校舎に講堂。
ここから多くの卒業生が育っていった。写真は講堂。



昭和4年(1929)に完成した庭園の記念碑。
第10代校長江口俊博先生が残した碑文。



昭和5年(1930)に創立50年を迎えた。50年を記念して、記念絵葉書が配られたり、記念絵画展が開かれたりとお祝いムード一色の年だった。



14代 近藤 兵庫



13代 永井 徳潤



12代 大野 芳麿



11代 隅部 以忠

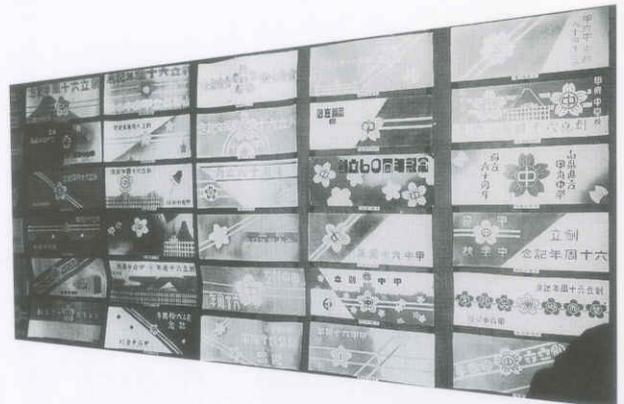
第3期 歴代校長

校舎の移転と戦争の気配



昭和10年(1935)8月4日、甲子園初出場決定。
 当時は、山梨、静岡、神奈川のブロック大会の中から出場校を決めていた。
 神奈川工業に5対4で勝ち、甲子園の切符を手に入れる。
 甲子園の初戦は、青島中学に10対3で勝利。
 2回戦は仙台の育英商業に敗退。

昭和10年8月4日、山・神・
 静ブロック大会で甲中優勝。
 甲子園初出場に観衆は興奮。
 (甲府飯田球場)



昭和15年(1940)創立60周年記念イベントが行われた。
 記念手ぬぐいの図案展覧会も開催。



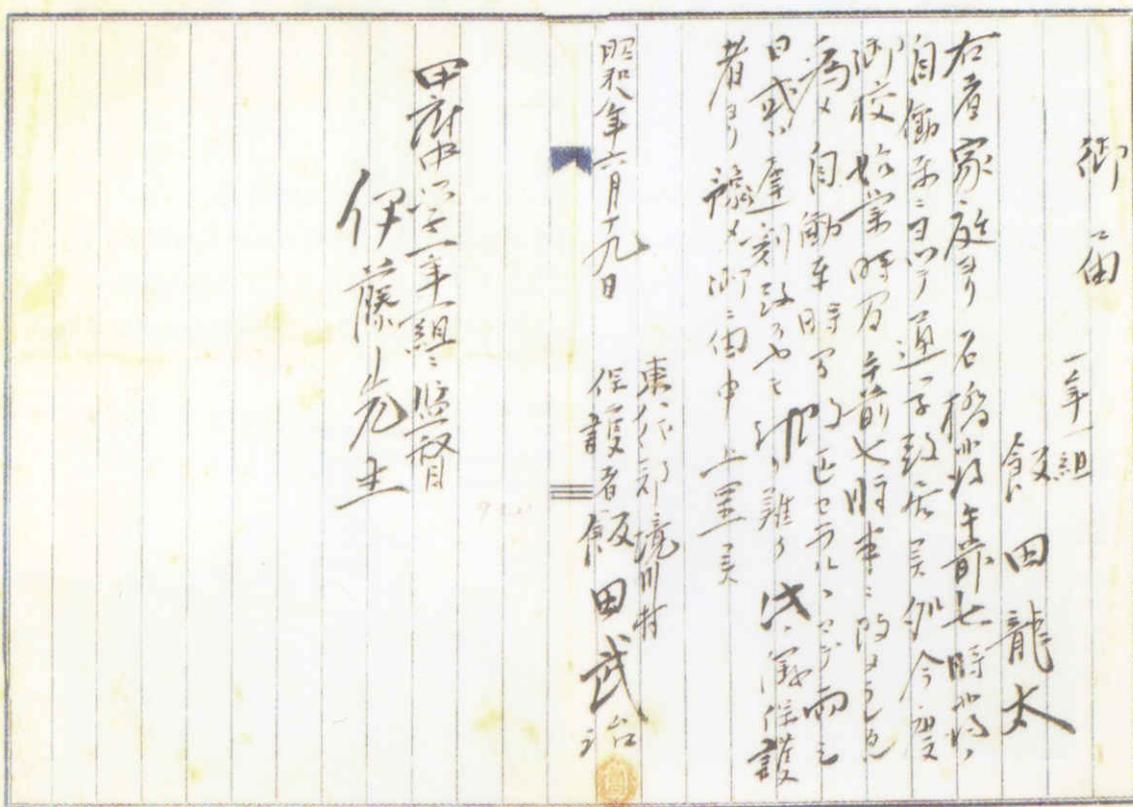
右上：昭和12年(1937)に日中戦争が始まり、
 学校教育も戦時色が強まっていった。
 県庁前広場で市内中学生による
 国民精神総動員強調行進が行われた。



右下：戦争は益々悪化し、「学問を学ぶ場」で
 あった学校も様変わりしていった。
 校庭整備の勤労奉仕やグライダーの練習など、
 学校とは名ばかりの場所となってしまった。
 写真は昭和19年(1944)ころのもの。

左上：昭和20年(1945)7月7日、甲府空襲。
 七夕空襲と呼ばれたこの空襲では数多くの貴い命が奪われた。
 写真は昭和20年、甲府駅前の焼け跡に集う甲府中学の生徒たち。
 仲間との再会を喜ぶ。

左下：終戦翌年の昭和21年(1946)には、伝統の強行遠足を実施。
 ゲートルにわらじ履きで杖を持つ生徒もいた。



親子二代の文学をはぐくんだ甲府中学
 - 飯田蛇笏と龍太 -

創立130年という歴史の古い学校だから、親子2代、3代、あるいはそれ以上も甲府一高（旧制甲府中学）に学んだという家族も少なくないだろう。

近代俳句の世界で金字塔を打ち立て、「雲母」という我が国第二番目の規模を誇った結社を維持してきた飯田蛇笏（武治）と、戦後俳句の旗手で「雲母」を受け継いだ飯田龍太の親子もその例である。父は明治32年に、子は昭和8年に入学している。

県立文学館の飯田蛇笏コーナーに興味深い資料が展示されている。

昭和8年6月19日の日付の「御届」で、書き手は蛇笏自身、相手は龍太の在籍する第一組の担任伊藤（忠一）先生宛てである。伊藤先生は数学を担当し、第二次大戦中は、生徒の兵役志願の風潮に反対し、戦後は山梨の定時制教育に尽力した反骨の教師だった。

「御届」の内容。

息子龍太は境川町小黒坂下の石橋停留所から7時のバスで通学しているが、学校の始業時間が7時半に改められたため、バスの時刻改訂があるまで遅刻するおそれがあるので、あらかじめお届けする。

学校は昭和3年には、舞鶴城内から現在地（当時西山梨郡千塚村）に移転していた。

写真から見る風貌もその文学的境涯も峻厳な印象のある蛇笏だが、この「御届」からは、ひ弱でもあった四男への蛇笏の父親らしい温かい心情が伝わってくる。



右ページ 蛇笏筆「御届」 昭和8年6月19日
 左ページ右上 蛇笏筆題字 昭和14年7月「俳句研究」
 左ページ右中 蛇笏 甲府中学在籍時
 左ページ右下 龍太 甲府中学5年（昭和12,3年ごろ）
 左ページ左 左龍太、右蛇笏 昭和33年か、飯田家の墓地で

親子で在籍と云ったが、蛇笏は甲府中学を卒業してはいない。4年まで在籍して、東京の京北中学に編入しているからである。それでも、「俳壇自叙傳」の中に、甲府中学での思い出を書いている。

「今日も亦教室でA——といふ英語の教師がリーダーそつちのけで俳句のはなしに熱中し、そのためにひどく刺激され、寒鷲をひねくつてみる気になつたのである。」

先生の示した句もその解釈も、それまで蛇笏が垣間見て来た伝統的な月並み俳諧とは全く異なった「心にしみじみしたものゝが沁みてる不思議なる俳句」の世界を見せてくれて、大いに感動をする。が、「私以外の総ての学生が索漠たる顔を教壇の方に向けている」ので、先生も「浮かぬ顔をしながら」俳句の話のうちきる。

蛇笏が高浜虚子に共鳴し、その四天王の一人となるきっかけが、甲府中学の英語教師の俳句談議にあつたかもしれないと思うのも面白い。

息子の龍太も幾つかの文章で甲府中学を回想している。たとえば、「雪隠」というエッセイでは、歴史を教えてくださいました博物の先生が「上杉謙信という武将はすこぶる山を愛して、みずから山という字を大書した額を常に厠の壁間へ掛けておいた」と語つたことがあつて、それがために自分は、「戦のつよい信玄よりも、その思索的な謙信をより好ましくおもう」ようになった、と書いている。これなども、甲府中学——高に流れるダンディズムを象徴するエピソードと思える。

龍太氏から、もう少し甲府中学在籍中の話を伺つておけばよかつたと、しきりに残念に思う今日このごろである。

文責・福岡哲司（昭和42年卒）

1948-1967

第4期

戦後の学制改革により、山梨県立甲府第一高等学校の歴史が新たに始まった第4期。

昭和23年(1948)4月、学制改革により普通科課程の新制高校となりました。

当初は中学校と、高等学校通信教育、同普通科定時制(夜間・男女)を併置。

昭和24年(1949)には、併設中学校の廃止、翌25年(1950)にははじめて全日制で男女共学が実施されました。



校歌発表会の様子。選者は山梨県出身の俳人、飯田蛇笏。



定時制、通信教育開校の様子。男女共学だったので、多くの女子学生も入学した。当時は働きながら、高校へ通う学生も多くいた。



70周年記念祭が昭和25年(1950)に開かれた。記念カーニバルが街頭で行われた。



19代 高遠啓一



18代 廣瀬勝雄



17代 齋藤俊章



16代 雨宮重治



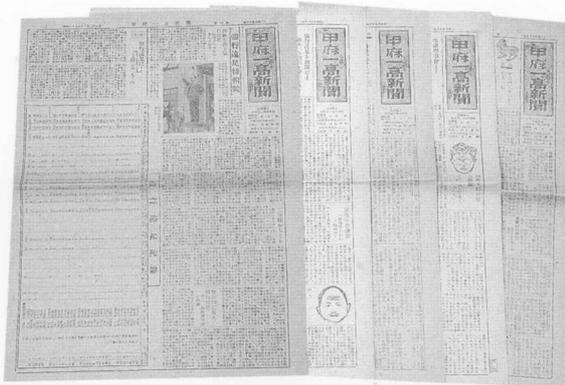
15代 篠原寛二

第4期
歴代校長

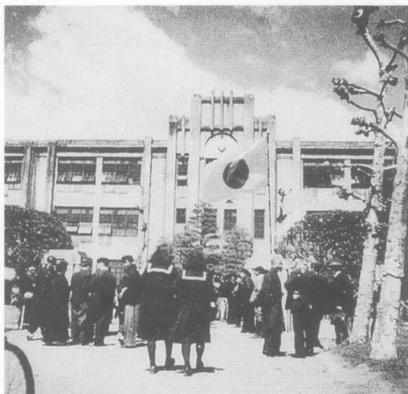
新しい風吹く時代



昭和25年(1950)の授業料の領収書。
授業料は一ヶ月200円だったと記されている。



今も続く「甲府一高新聞」。昭和23年(1948)に創刊した。



昭和35年(1960)に行われた80周年記念祭では、石橋堪山(元内閣総理大臣)が記念名譽会長になる。
記念カーニバルや運動会など80周年記念行事は盛大に行われた。

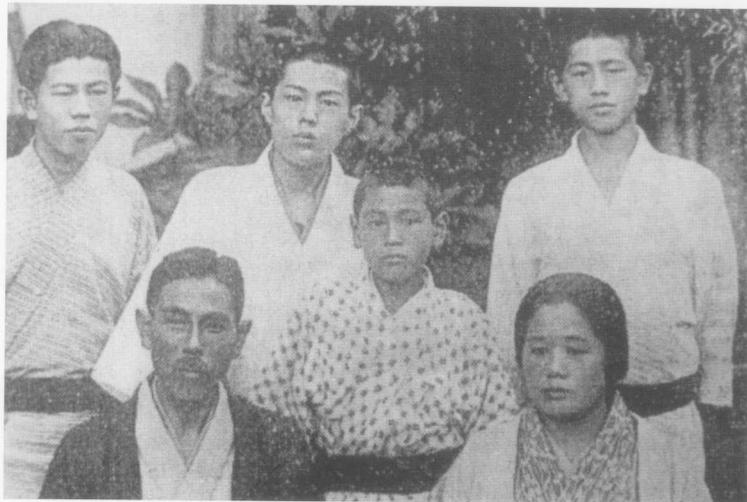


昭和23年(1948)に定時制は男女共学となり、初の女生徒入学。男女共学1回生となる。
上の写真は昭和25年(1950)の全日制入学式の様子。
当時の女子の制服はセーラー服だった。



昭和36年(1961)、26年ぶりに
2度目の甲子園出場を果たす。
県大会決勝で、熱戦の末甲府工業を下した。

甲府一高体育館竣工のために―矢田茂―



矢田茂という名前をご存知だろうか。

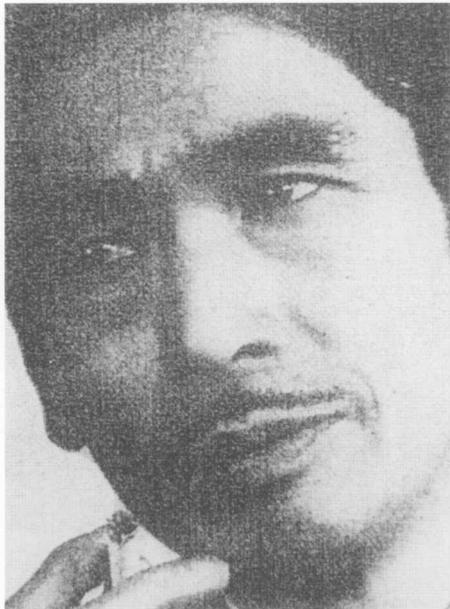
大正6年、甲府市元紺屋町で生まれた一人の少年。父・矢田一法は、山梨県主席視学。兄弟4人の末弟として育った。兄の矢田喜美雄はベルリンオリンピックでハイジャンプに出場し、5位入賞という成績を収めた。

矢田茂は甲府中学校を昭和11年に卒業した。

甲府中学校卒業後、日本大学歯科学部へ進学するが、両親には内緒で日本ダンシングチームに所属変えをしてしまう。朋友・森繁久弥と共演をし、その交遊は生涯におよんだ。ダンサーとしての素質は抜群で、モダンダンサーとして頭角を現す。また、舞台演出家としても活躍する。

日劇ではその力を十分に発揮し、日劇50年の歴史の中で、ダンサーとして、振付師として、演出家として、彼の右に出るものはない、とまで言わしめた。まさに日劇ダンシングチームの育ての親である。

彼は、母校甲府一高が体育館建設に予算不足で苦慮しているとの情報を聞き、それならばと、「ダン・ヤダ・ダンサーズ」総勢30名を引き連れて、甲府公演を行った。時に昭和29年11月14日、午後6時開演の夜間公演だった。会場は甲府二高(現甲府西高校)の体育館、当時はパブリックホールはなかった。ショーの一部は奥田宗宏とブルースカイ・オーケストラのジャズ演奏、二部は森繁久彌ショー、人気芸能人森繁久彌が友情出演をしてくれ



右ページ

上：日劇「オーマイババ」6場。作・演出・振付：矢田茂。中央が森繁久彌、右端は香取マリ。

下：矢田家家族の写真。元紺屋時代。父親は厳格な教育者だった。中央の少年が矢田茂。新紺屋小学校在学中。

左ページ

上：矢田茂。

下：昭和29年11月14日のダンヤダダンサーズの公演パンフレット。

た。三部は本命の、ダン・ヤダ・ダンサーズ
シヨ。香取マリ他総勢30名がジャズやマン
ボのリズムにのり踊った。この時、創作ダン
ス、モンローウオークも披露された。

甲府公演は大成功を収めた。そして、その淨
財は甲府一高に納められ、当時、県下一の体育
館が竣工したのである。この体育館建設によつ
て、甲府一高の体育振興が図られ、県下のスポー
ツ大会ではことごとく優勝や上位入賞があり、
名門甲府一高の名を高からしめた。

昭和35年には、矢田茂は、ダン・ヤダ・ダ
ンサーズ84名を率いて、パリのムーランルー
ジュへ、フランス航空機を貸し切り、乗り込
んだ。一年間という長期公演を行い、大成功
を収めた。当時の大統領、ドゴール大統領も
観に来たという。国際的な評価を得てダン
サーとして大きく成長した。帰国後、東京吉
祥寺にフラメンコ小屋「ギターラ」を開設、
スペイン芸能を輸入、繁盛、盛況を収めた。
順風満帆の人生行路だった。

不幸は突然起きた。昭和48年、日比谷公
会堂の階段から転落、重度の身体障害者と
なってしまった。ダンサーの道を歩んで30
年、その生活にピリオドを打たざるを得な

くなった。車いすでの生活を余儀なくされ
た。ダン・ヤダ・ダンサーズのプリマドンナ、
マリーナ（香取マリ）が甲斐甲斐しく生活
の世話をした。絶望的だった矢田茂の生活
に希望の光が差した。

国際ホスピタルシヨをテレビで視聴、英国
ベック社の電動車いすが映し出された。これを
観て即座に購入、翌日から街に出て、再び生氣
を取り戻したという。並外れた行動力に周りの
者は驚いた。人前に出るのは3年ぶりだった。

東京新宿に、ボランティアグループ「新宿
福祉の家」を開設。ハンディキャブ（福祉車両）
を開発、その普及運動のため、自ら同乗し全
国キャンペーンを始める。矢田茂の身体障害
者の救援事業が始まった。紆余曲折しながら
も、事業は確実に前進した。

昭和58年、参議院議員選挙に福祉党から
出馬、救済事業を進展させる上で、この事
業を理解してほしかったからである。熱心
に街頭演説をしたが、涙を飲む結果となっ
てしまった。昭和62年1月逝去、享年70歳。
生まれ故郷である甲府市元紺屋町宋信寺に
眠っている。

文責・植松光宏（昭和31年卒）



1968-1990

第5期

高度成長期から新しい時代へ。

第5期の22年間は、総合選抜が2校から3校、4校、さらに5校へと移り変わった時代。

また、90周年、100周年、105周年、110周年の各記念式典を行い

歴史の節目を振り返った時代でもありました。



昭和43年(1968)野球部が全国高校野球選手権大会へ出場。初戦は8月11日の日曜日。対戦相手は鳥根県代表の浜田高校だった。先取点をあげたのは、甲府一高。6回表に先頭バッター小沢がこの大会第2号目となる本塁打を放った。しかし、8回裏には一点を返され、延長戦に。10回裏に1点を決められ、初戦突破の夢は果たせなかった。

右：
昭和43年(1968)3月に初めて実施された甲府学区の総合選抜では、甲府一・甲府南高総合選抜審査委員会が、甲府一高の図書館で開かれ、入学予定者の配分作業を報道公開した。当初初めてのこととなった総合選抜制での分け方は、成績順に学区内外、男女別に分けたカードをそれぞれの両校に均等に分けるといういわば「振り分け」。

左：
総合選抜制が導入された甲府一高と甲府南高では、生徒だけでなく先生も三分の一が替わった。



24代 山村 鉄夫



23代 岩波 政雄



22代 山下 稔



21代 若林 勇



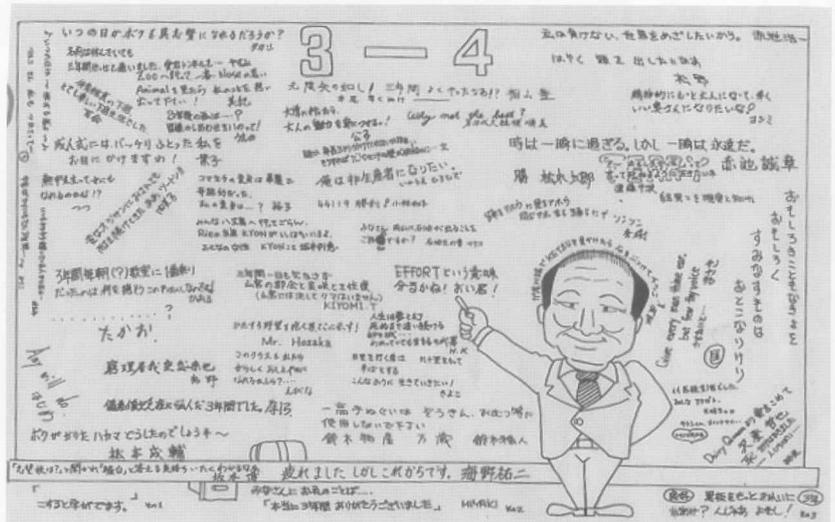
20代 根津 修蔵

第5期 歴代校長

100年の区切りを迎える



昭和45年(1970)に90周年、昭和55年(1980)には100周年の記念式典を行った。それぞれに記念の美術展覧会を開催。卒業生や在校生の作品が並んだ。



学園祭のファイヤーストームは、この5期の22年の間に様変わりをしていく。現在、甲府一高ではこのファイヤーストームは行われていない。学園祭の最終日にグラウンドに集まって行うファイヤーストームは、昭和の時代に学生生活を送った人々には懐かしい思い出の一つ。



昭和54年(1979)に創刊された同窓会だよりは、31年経った今でも続いている。創刊の辞として当時の理事長小野熊平のコメントが載っている。



26代 三澤弘毅



25代 望月政廣



右上：甲府クラブの試合を見守る川手良萬
 左上：甲府中学時代蹴球部。県下中学校選手権大会で優勝したときのもの。
 右下：甲府一高のサッカー部。ユニフォームもなく、ワイシャツで出場。
 左下：甲府クラブ結成当時の一枚。社会人リーグなどで色々な職業の人がいた。

山梨のサッカーの歴史を作った - 鶴城クラブ・甲府クラブ -

平成22年11月14日、ヴァンフォーレ甲府のJ1昇格が決まった。この快挙を山梨県民の誰もが喜んだ。Jリーグ発足から11年、ヴァンフォーレ甲府が今のように全国で戦えるようになったのには、かつてのサッカー小僧たちの大きな力があつたことを忘れてはならない。

ヴァンフォーレ甲府の前身である甲府クラブは昭和40年に結成された。その中心メンバーとなっていたのが甲府一高サッカー部OBによる鶴城クラブ。きっかけは鶴城クラブが全国社会人大会出場権を獲得したことだった。第1回全日本社会人大会ではベスト8になり、さらに選手強化のため、県内の他高校出身者を加えチーム名を「鶴城クラブ」から「甲府クラブ」へと変えた。クラブの結成には莫大な資金が必要となる。その全てを私財を投げ打って支えたのが、甲府一高OBの川手良萬。サッカーをこよなく愛する人たちの力により、甲府クラブの歴史は始まったのだ。

昭和42年には「甲府サッカークラブ」として関東リーグ入りを果たす。その後、昭和44年には第5回全日本社会人大会で初優勝を飾り、全国に「甲府サッカークラブ」の名前を知らしめた。監督の鈴木旻は第一の目標を達成した喜びに感涙した。

当時の鶴城クラブのメンバー、森沢幸夫さん(OB)、浅井和夫さん(OB)、市村洋さん(現在鶴城クラブ会長)に集まっていただき当時のお話を伺った。現在でも鶴城クラブは健在で、年末には忘年会と称して「頭を冷

やす会」、お正月には甲府一高のグラウンドで後輩たちと一緒に初蹴り会でボールを蹴っているという。

甲府一高サッカー部の創部は昭和2年。昭和5年には第1回県下中学校選手権大会で優勝を果たしたという。戦後昭和22年には待望の全国中学校蹴球選手権大会が兵庫県西宮で復活。この時の大会には、甲府中学（現甲府一高）は最大のライバル韭崎中学（現韭崎高校）を破り、全国大会に出場し、全国4位の成績を取めた。その後、昭和23年の学制改革により、全国高校サッカー選手権となった。それまでの「蹴球」から「サッカー」と呼び名が変わったのもこの時代である。この大会で悔しい思いをしたのが、森沢幸夫さん。

「甲府中学ではレギュラーとして出ていたのに、学制改革で、現在のようになかたち（3年制、高校3年制）になった時に、お前はまだ中学生だから全国大会予選には出られないと言われたんです。あれは本当に悔しかったですね。」

森沢さんがサッカーを始めるきっかけは何だったんだろう。

「私たちが学生の時代は戦争真ただ中で、学校で勉強をしたという思い出がありません。学校へ行くのではなく、当時学生はそれぞれが分かれて軍事施設などへ派遣されたりしていました。そういう時代だったんです。戦争が終わり、さあ今日から勉強をしましょう！と言われても出来ないですよ。そこで、

何か面白いものはないかと探した時に、ボール一つあればできる蹴球をやろうということになったんです。」

当時の写真を見ると、鉢巻をしている（40頁右下写真）。この姿は？とさらに森沢さんに尋ねる。

「当時は気合いを入れるために試合の時は鉢巻を巻いたんです。それにこれ見てごらん。確かこの時は試合に出るためのユニフォームがなくて、ワイシャツを買ってきて自分たちで染めたんだよね。だからみんなワイシャツを着ているでしょ。それからストッキングは部屋に代々先輩達が置いていってくれて、みんなそれを使うの。でも、何度も汚れては洗っているからバリバリ。履くのがとっても大変だったよ。」

スパイクは試合の時は履くけど、練習はほとんど裸足。スパイクを頻繁に買うことは出来なかつたので、使い込んでいくうちにスパイクのポイントを打ちつけてあるクギが足の裏に刺さって痛かったという。ボールは1個しかなくて、空気もめつたに入れないから蹴るとバコバコ音がした、など当時の懐かしい話をしてくれた。森沢さんの話を横で楽しそうに笑いながら聞いていた浅井和夫さん。浅井さんがサッカーを始めたきっかけは、子どもの頃体が弱かったからだという。その後、浅井さんは、甲府一高のサッカー部で活躍し、甲府クラブへも入った。

「今の子ども達には考えられないと思うけど、

すね当ては竹で自分で作ったり、ボールは本皮だったので、一回一回空気を抜いて、試合や練習の前に空気を入れるんです。それは下級生の仕事。みんなサッカーが好きだったからね。」という時の顔は、サッカーボールを追いかけていた少年の顔に戻っている。

「今日（10月18日）はおやじの命日だったので、昨日みんなでお墓参りに行ってきたんです。」と市村洋さんが教えてくれた。鶴城クラブ、甲府クラブのかつてのメンバーに「おやじ」と呼ばれている「川手良萬」。誰もが心から慕っていた存在だった。

最後に森沢さんがこんなことを話してくれた。「サッカーを通じて、私たちは本当にいい仲間をつくる事ができた。何十年経っても、仕事で肩書きだけは偉くなっても、バカを言える仲間、バカになれる場所があるかどうかで人生は楽しく暮らせるかが決まる気がするんだよ。甲府一高のサッカー部の連中は今でも会うとボールを蹴っていたあの時に戻っちゃうの。それが仲間なんだよ。」

甲府中学、甲府一高、鶴城クラブ、甲府クラブ、ヴァンフォーレ甲府と続いてきたサッカーの歴史。その歴史は日本のサッカーの変遷と言っても過言ではない。川手良萬が願った「山梨にも、いつかこの場（全国レベル）で戦える強いチームを」という思いは、今、確実に受け継がれ、未来の子どもたちへ夢を与えるスポーツとなっている。

1991-2010

第6期

現在まで続く第6期。平成3年(1991)に英語科が新設されました。

大きな出来事としては、平成4年(1992)に始まった校舎の改築工事です。
戦前から続いた歴史ある校舎を解体し、新しい時代へとつなげるための新校舎の建設は、
甲府一高の新しい時代への第一歩でもあります。



校舎を解体する前に、一高のシンボルの校章を外す作業が行われた。



解体中の校舎。



大切に保管され、新しい校舎の完成を待つ校章



歴史の重みを感じる校章。



31代 奥石 順一



30代 雨宮 惇



29代 関口 稔夫



28代 伊藤 嘉雄



27代 廣瀬 重雄

第6期 歴代校長

新しい時代へとつなげるために



解体工事が進む中、ガレキの上で卒業アルバムの写真を撮るクラスも。



平成3年(1991)には、英語科が新設された。



平成5年(1993)に行われた新校舎竣工式。最後に行われたのは校章の取付けだった。



現在の甲府一高の校舎。
新しい歴史は日々刻まれている。



36代 跡部 和



35代 新津 元



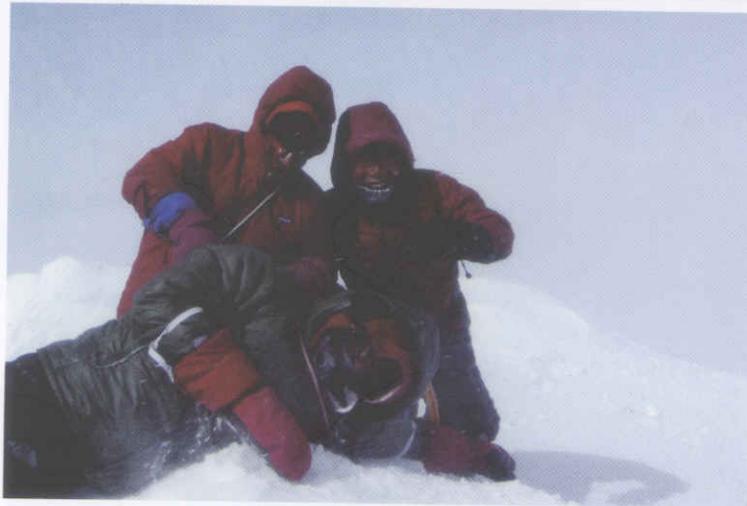
34代 高瀬 孝人



33代 植松 和夫



32代 山本 秀彦



上：右手前が佐藤祐介さん / 下：手前が佐藤祐介さん

生きている実感、それがクライミング

— 佐藤 祐介 —

氷と雪、険しい岩壁の登はんに挑むアルパイン。このアルパインクライマーとして活躍しているのが甲府一高出身の佐藤祐介さん。2008年には、難易度の高いと言われる北米の最高峰マッキンリーを連続制覇した。佐藤さんの山との出会いは、甲府一高山岳部時代。卒業後、金沢工大へ進学してからは「週末はほとんど山にいる状態だった」という。一年間休学して南米・アンデス山脈でクライミングの旅を続けたこともあるという。

現在は地元山梨へ戻り、仕事を続けながら山への挑戦を続けている。今回、佐藤さんに一高時代の思い出、現在の活動内容を伺った。

「一高時代は、山岳部に所属していたのですが、湯村山や愛宕山へ登ってから学校へ行っていました。当時は部員も少なかったのですが、団体競技というより個人で鍛えるという感じでした。クライミングは大学時代に出会いました。高校時代に山岳部に所属していたことが、今の僕の活動の原点であった気がします。」

一年のうちの大半を山で過ごした大学時代。一高山岳部員は卒業すると鶴城倶楽部へと自動的に入ることになっている。

「大学時代、鶴城倶楽部の先輩たちと山へ登ったことがあります。社会人になってからも登山を続けている先輩たちとの交



流は刺激になりました。」

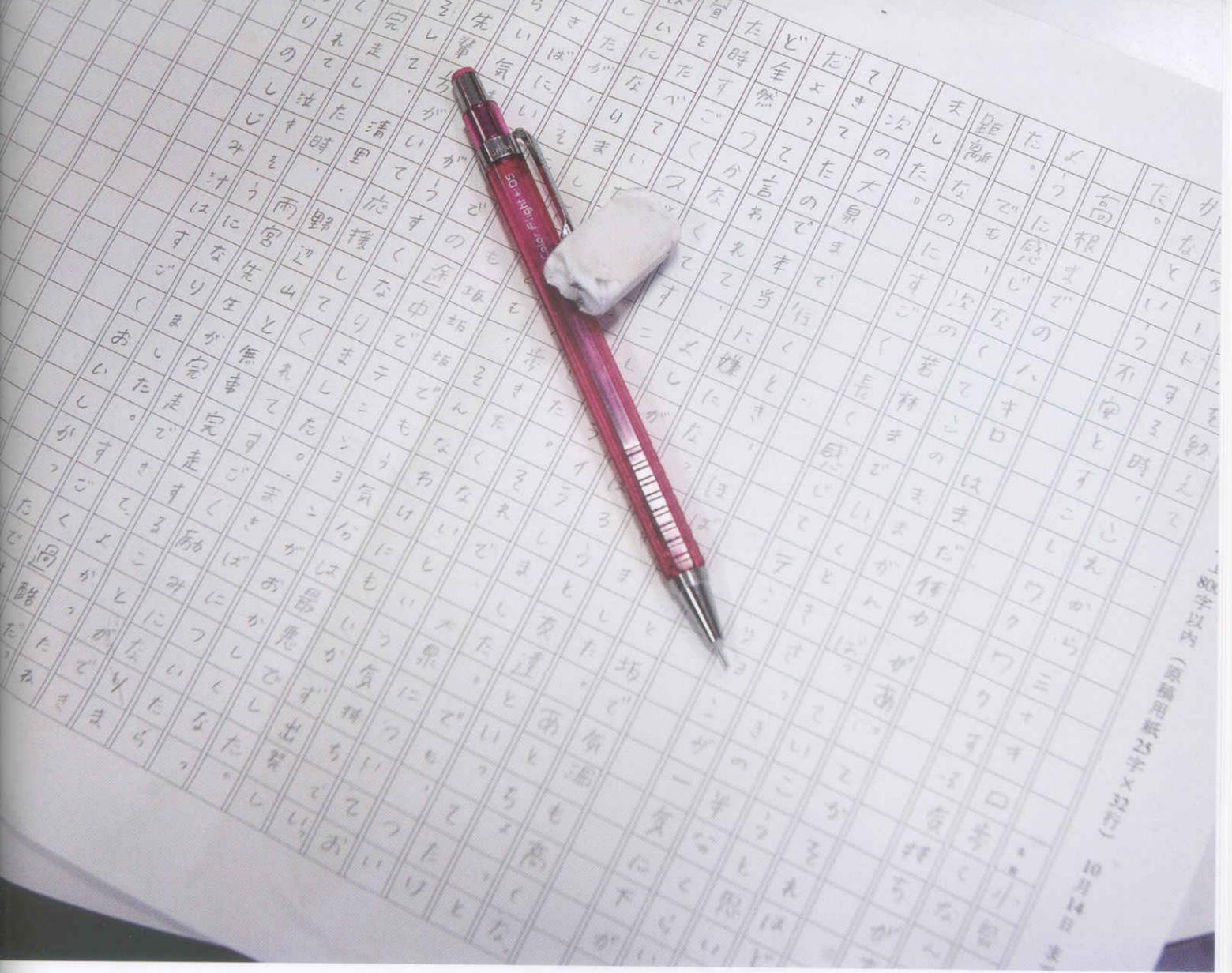
孤独と戦い続けながら上へ上へと挑むアルパイン。90度近い壁を登り続けることは常に死と隣合わせの状態。出発時は一緒だった仲間が帰りにはいなくなっていることもあると言う。

「ある時は、一晚中幅15センチの所に立っていたということもありました。寝てしまつたらそのまま下へ落下。寒さの中で仲間と3人で耐えました。今となつてはいい思い出ですが、あの時は本当にこのままどうなるだろうと考え、不安でした」。そんな極限の世界で戦っている佐藤さんの気持ちを動かすクライミングの魅力はどんなところにあるのだろうか。

「クライミングは自分自身、生きていることを確認する手段であり、通過点。チャレンジすることに終わりはなく、計画をしている時のドキドキ感やワクワク感は何度体験しても楽しいもの。充実した人生を送りたいと思っています。」

全国各地で様々な人生を送っている一高卒業生。卒業生の活躍は在校生への励みになり、夢へとつながる。今回お話を伺った佐藤祐介さんの人生の旅の「つづき」とまたどこかで出会いたいと思った。

文責・雨宮千春



強行遠足で つくられるもの

甲府一高伝統の強行遠足。

「歩く」ことにこだわった

創始者の江口俊博先生の思いは、

130周年を迎える現在まで続いています。

歩くことは己を見つめること。

歩くことは、自己を確立すること。

甲府一高精神は

この強行遠足から作られるといっても

過言ではありません。

強行遠足と 江口俊博先生

大正13年、甲府中学で始まった強行遠足。その創始者は当時の校長、江口俊博先生でした。江口先生は、熊本県生まれで、帝国大学卒業後、新潟県の小千谷中学校、広島中学校、長野中学校の校長を歴任し、大正12年に本校の校長に赴任しました。翌年、当時の文部省から全国中学校に「明治節（11月3日）を祝うことから、その日を中心として各学校で、何か有意義な体育行事を実施せよ」との通達がありました。そこで江口先生が推奨したのが「歩く」こと。11月4日を本校の「体育の日」と設定し、全校生徒がそろって「歩く」ことを実施しました。これが、現在まで続いている強行遠足の始まりだと言われています。

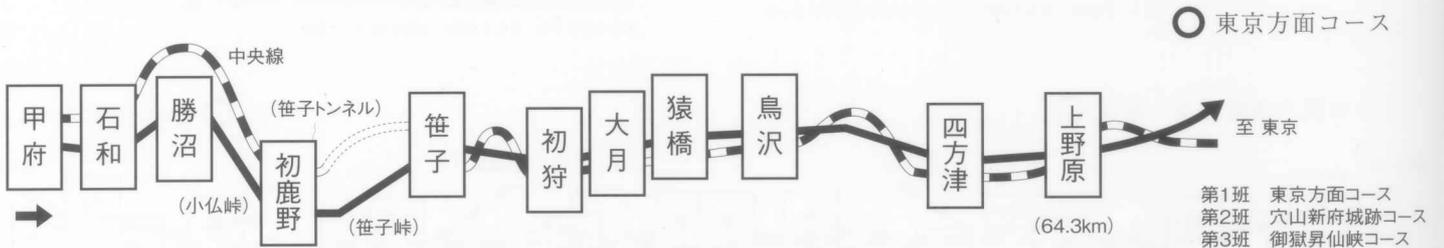
江口先生が歩くことにこだわったのは、ご自身がかなりの健脚家だったということも

の理由の一つです。甲府中学に赴任してからも白根三山を縦走されるなど、「歩く」ことに関しては、特別な思いがあったようです。江口先生は、「自己の体力に応じて歩けるところまで歩く」ことを提唱しました。「一切の妥協と怠慢を排して精神の限り歩くことを重視した」と昭和41年に発行された『強行遠足の沿革誌』には記されています。

「強行遠足」と名付けたのもただ単に「歩く」のではなく、「歩く」ことにより「自分の内面を知る、限界を知る、可能性を知る」ことを江口先生は伝えたかったからではないでしょうか。「自分の弱さを克服するため、強く進む。これが強行遠足」。その後、江口先生の精神は、歴代の校長へと引き継がれ、今でも一高伝統の行事として伝わっています。



第10代校長 江口俊博先生



強行遠足は、現在では小諸方面コース（76m）となっていますが、第1回目は東京コースといって、甲府から勝沼、笹子トンネルを通り、上野原駅終着とした64,3キロの道のりを歩いたと記録されています。しかし、笹子トンネルと小仏峠という難所があり、このコースは第1回限りで変更されました。翌2回、3回目は甲府から富士見を通過して、松本まで。

しかし、まだまだ余力ありとわかり、4回目、5回目は木曾まで距離を延ばしています。4回目から24時間制にして行けるところまで行くという決まりになりました。6回目以降はさらに距離を延ばし信濃大町方面。その距離167,1キロと尋常ではない長さになってきました。37回目以降は、小諸までの100キロと短縮されています。



野辺山のしじみ汁 (昭和56年・1981)



昭和16年(1941) 出発風景



つかの間の休息 (昭和21年・1946)



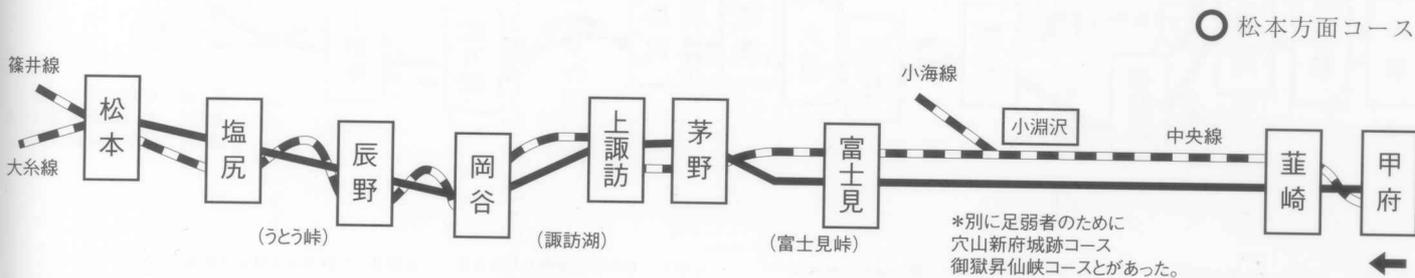
一路松本へ (昭和21年・1946)



正体なく眠る (昭和56年・1981)



杖をつきながら、ひらすら歩く (昭和36年・1961)





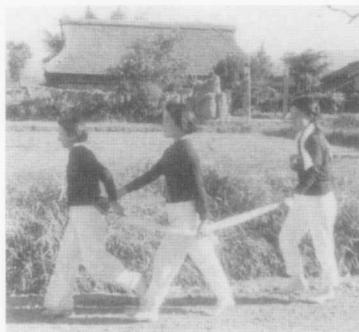
三軒屋をスタートする女子 (昭和45年・1970)



穴山橋付近 (昭和25年・1950) この年、初めて女子が参加した。



眠る、眠る、甲府まで (昭和54年・1979)



タスキをもって一緒に歩く女子 (昭和35年・1960)



麦茶を飲んでひと休み (昭和56年・1981)

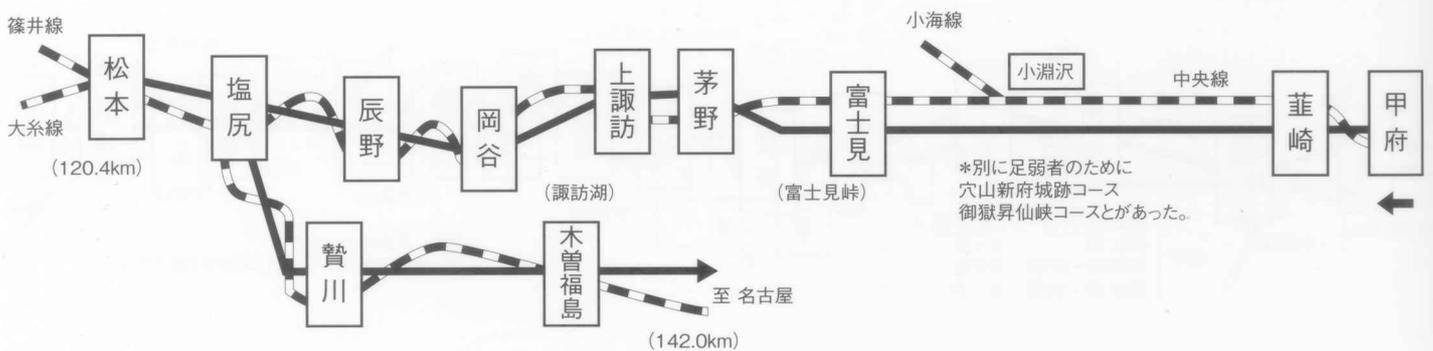


(昭和32年・1957)



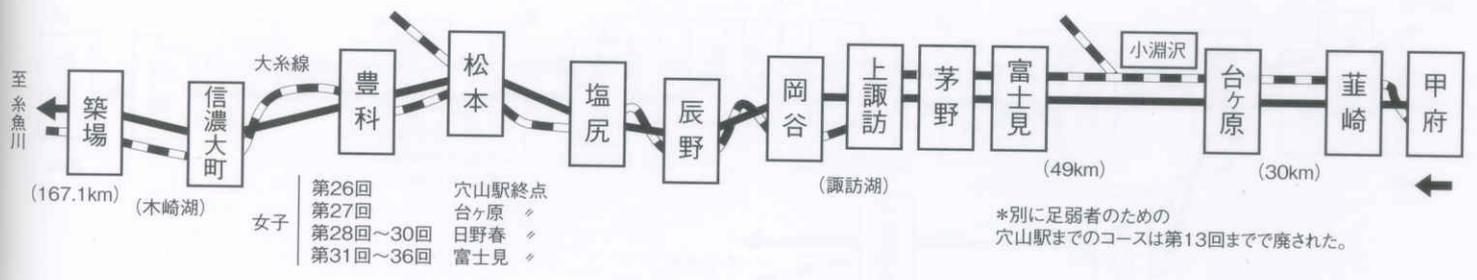
みんなで手を取り合ってゴール (昭和56年・1981)

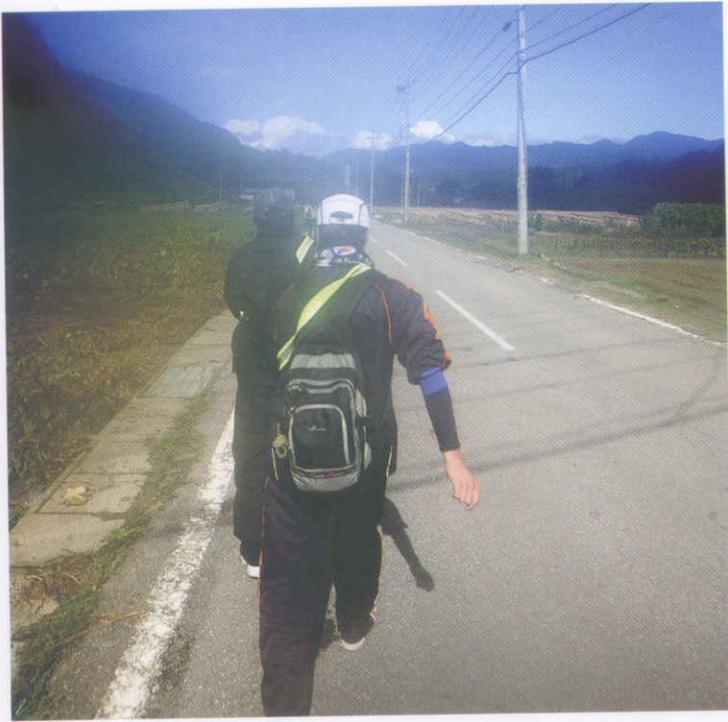
○ 松本・木曾福島方面コース



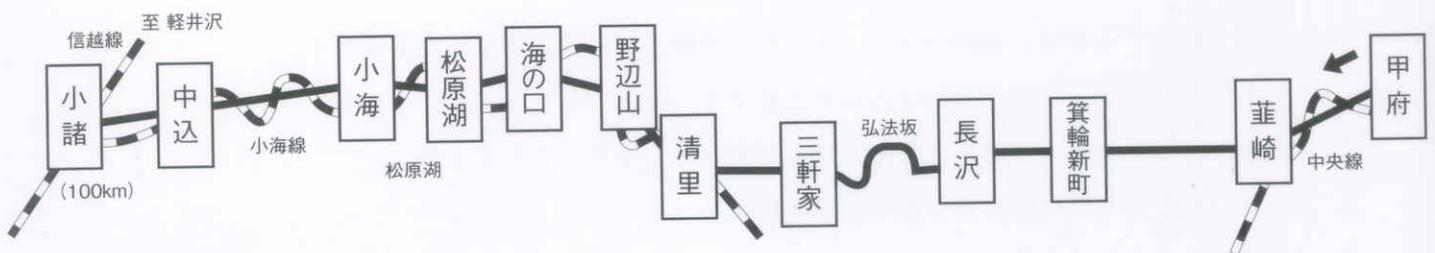


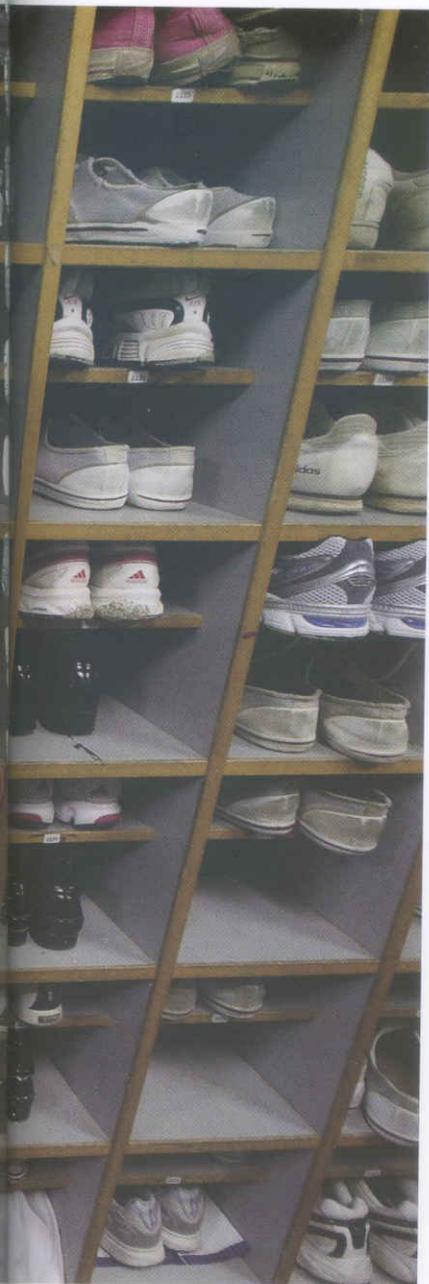
○ 信濃大町方面コース





○ 小諸方面コース





甲府一高ごよみ 20⁰⁰-20¹⁰

「10年ひと昔」と言いますが、

10年という年月は人生の中で大きな節目とも言えます。

ここで紹介するのは、2000年から2010年の甲府一高のさまざまな出来事です。

一人ひとりの学生生活が散りばめられた暦です。

大きな志も、一日一日の小さな積み重ねがあってこそ立てられるもの。

多くの先輩たちが経験した一高での青春時代。

そこではさまざまな物語が生まれています。



04 月 フーバー高校（アメリカ）と姉妹校締結
フーバー高校生来校

06 月 インターハイ予選でソフトテニス部男子団体優勝
（46年ぶり2回目）
関東大会でアーチェリー部花輪秀剛君6位

08 月 インターハイでアーチェリー部
花輪秀剛君3位（日本高校新記録樹立）
ソフトテニス部男子団体出場、久富・野沢ペア3回戦進出
全国高校総合文化祭に書道部清水麻里さん出場



アイオワの高校生は日本の文化に触れました



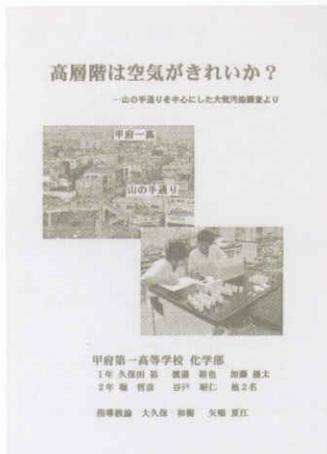
全国高校総合文化祭に出場した書道部

10 月 第74回強行遠足実施
北海道北見北斗高校より代表男女各2名参加

創立120周年記念式典・記念音楽会
（県民文化ホール／10月20日）

記念美術展（県民会館／10月19日から23日）

山梨県・アイオワ州姉妹締結40周年、アイオワ高校生来校



県の高校芸術文化祭で化学部最優秀賞受賞



野球部の部室が完成

11

月 県高校芸術文化祭で化学部最優秀賞
野球部部室完成

01

月 先生たちのためのIT講習会（1月27日・28日）



ITの講習会で真剣な先生たち



専門雑誌「ARCHERY」5月号に掲載されたインターハイの様子
左から2番目が花輪先生

暦

ばなし

「アーチェリー部」

6月に関東大会で6位、8月にはインターハイで日本高校新記録を樹立した花輪秀剛君。現在は、甲府一高の体育教師として母校で後輩たちの指導にあたっています。花輪先生は、中学時代はサッカー部に所属していました。アーチェリーとの出会いは中学時代に先生から勧められたからだといいます。サッカーはチームで戦うスポーツですが、アーチェリーは個人で戦うもの。全くタイプの違うスポーツを始めるにあたり、最初は抵抗があった花輪先生ですが、甲府一高へ入学し、アーチェリー部へ入部すると、その才能を開花させました。「一人で戦うアーチェリーは最後は自分との戦い。精神的に強くなければ出来ないスポーツだと思います」。そんな花輪先生の指導のもと、アーチェリー部で現在活躍しているのが、八巻絵梨佳さん。現在、3年生の八巻さんは将来を期待される有望な選手。目標はオリンピック出場だといえます。花輪先生が作った歴史を今、八巻さんが受け継いでいます。

04 月 山本秀彦第32代校長就任

07 月 インターアクト韓国研修（7月22日～）

08 月 県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部金賞、インターハイにアーチェリー部団体男女出場
全国高校総合文化祭に放送部石田真美さん、
書道部石橋由梨さん、西山真実さん、古谷美和さん出場

09 月 第1回読書会

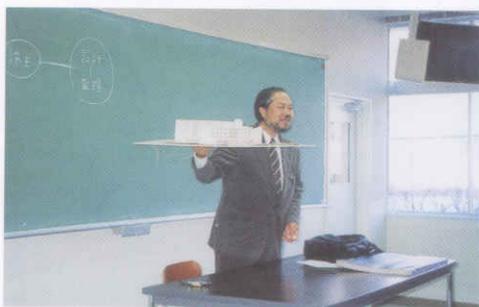


生徒が主体となって行う読書会

10 月 第75回強行遠足実施
創立121周年記念式典
県新人大会でテニス部男子団体優勝

11 月 県高校芸術文化祭で箏曲部、化学部
芸術文化祭賞

01 月 1年生のためのキャリアガイダンス実施



先輩たちの話を聞くのは将来への一歩へとつながります

03 月 グラウンド北側防球ネット整備

暦

ばなし

75回目の強行遠足

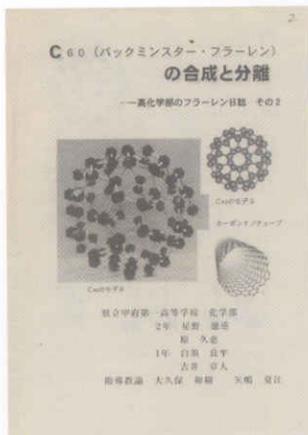
75回を迎えた強行遠足が始まったのは大正13年です。その当時の甲府中学校は男子校で、強行遠足は日本男児の精神力と肉体を鍛えることを目的に始まったものです。昭和25年から男女共学となった甲府一高ですが、女子も強行遠足に積極的に参加し、強行遠足の精神を受け継いでいます。

06 月 インターハイ予選でテニス部男子団体優勝

08 月 全国高校総合文化祭に箏曲部・書道部戸栗彩さん出場
インターハイにアーチェリー部団体男女出場

09 月 第2回読書会開催

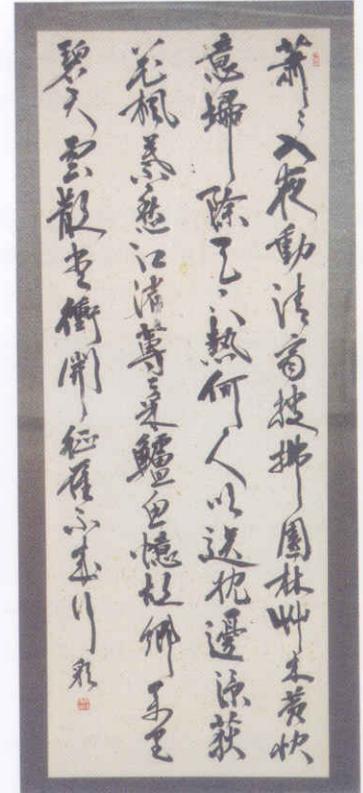
10 月 第76回強行遠足で松原湖検印所過ぎで、生徒の死傷事故起こる
創立122周年記念式典
山岳部女子が関東大会連続18回出場で表彰
県新人大会でテニス部男子団体優勝



11 月 県高校芸術文化祭で化学部芸術文化祭賞

12 月 関東選抜大会でテニス部男子団体8位

03 月 全国選抜大会にテニス部男子団体出場
(山梨男子8年ぶり)



全国大会に出品した戸栗彩さんの作品

暦

ばなし

続けることへの想い

第76回の強行遠足。この年、松原湖検印所過ぎで生徒の死傷事故が起こってしまいました。これは卒業生、在校生全ての一人に大きな衝撃を与えた出来事でした。事故で死傷した生徒のご両親から「これからも歴史ある強行遠足を続けてほしい」という強い願いを込めた新聞への投書もあり、強行遠足は存続することになりました。

04 月 植松和夫第 33 代校長就任
日本水泳選手権に水泳部川口一画君出場

05 月 県総合体育大会で水泳部男子総合優勝、
テニス部男子団体優勝

06 月 関東選手権大会で陸上部
松澤玲花さん 400m で 8 位
インターハイ予選でテニス部男子団体優勝

08 月 インターハイでテニス部
男子団体ベスト 16 (山梨県男子初)、
水泳部出場、アーチェリー部団体男女出場
全国高校総合文化祭に放送部廣瀬雄大君出場

11 月 秋季関東大会に野球部が 24 年ぶりに出場
関東新人大会に陸上部山口はなさん 800m で 5 位



県の総合体育大会で優勝した男子水泳部のメンバー

07 月 NHK 杯全国高校放送コンテストに
放送部中込佳奈子さん、廣瀬雄大君出場

09 月 国体に水泳部川口一画君、長坂優志君出場

10 月 第 77 回強行遠足実施
終点地を小諸から野辺山に変更し、
男子 53.7km、女子 31.0km となる。
創立 123 年記念式典



24 年ぶりの関東大会出場にわく一高応援団

01 月 関東地区高校放送コンクールに
放送部辻直子さん、浅原佳織さん、
ビデオメッセージ部門出場

03 月 多目的室を職員室に改修し、
学年職員室を廃止

暦

ばなし

24 年ぶりの切符

伝統の甲府一高野球部の創設は明治 24 年。その歴史は甲府一高の歩みとともに築かれてきました。過去に数回の甲子園出場も果たしている野球部ですが、この年に 24 年ぶりに秋季関東大会への切符を手にしました。関東大会出場をかけた試合では、OB 共々大いに盛り上がり、全校生徒一丸となり応援にも熱が入りました。試合は日大明誠高校に 8 対 1 で勝利。深紅に輝く応援団旗からは一高魂がみなぎっていました。

04 月 文部科学省 SELHi (スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール) に指定される。

06 月 インターハイ予選でテニス部男子団体優勝
山梨大学附属中学校との連携授業を行う
関東大会で空手部大木格君優勝

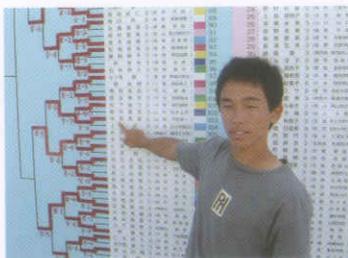
08 月 インターハイで空手部大木格君 3 位
テニス部保坂充彦君ベスト 16
アーチェリー部団体男女、水泳部出場
県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部金賞

10 月 第 78 回強行遠足雨天のため途中中止となる。
県新人大会で水泳部女子総合初優勝、テニス部男子団体優勝

11 月 県高校芸術文化祭で箏曲部、化学部が
芸術文化祭賞
青少年読書感想文コンクールで
佐久間ともかさんが県教育長賞受賞

05 月 県総合体育大会で水泳部男子総合優勝、
テニス部男子団体優勝
学校別成績では男子総合 5 位

07 月 全国高校総合文化祭に書道部森本めぐみさん出場
NHK 杯全国高校放送コンテストに放送部廣瀬雄大君、
豊田和希君、ラジオドラマ部門出場



テニス部男子はこの年、インターハイ個人で保坂充彦君がベスト 16 入りを果たしました



12 月 SELHi 講演会

02 月 SELHi 異文化講座で、
外国人の先生が講演

暦

ばなし

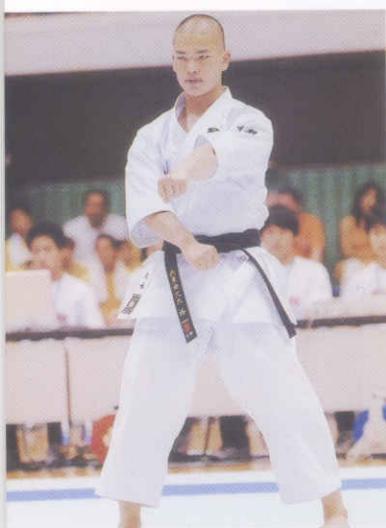
空手一色の日々

8月に行われたインターハイで堂々の3位を獲得した空手部の大木格君。現在は母校甲府一高で体育教師として後輩の指導にあたっています。

小さい頃から空手の長谷川道場へ通っていたという大木先生。甲府一高時代はとにかく空手一色の日々だったと言います。学生時代一番の思い出は、応援練習と強行遠足。そして部活後に仲間と一緒に通った学校前の店。現在、空手部の顧問として後輩を育てる立場になった大木先生ですが、自分自身も世界大会などへの挑戦を続けています。

大木格先生
平成 22 年度戦績

空手世界選手権
団体形：銀メダル
個人形：銅メダル
アジア大会
男子形：銀メダル



04 月 高瀬孝人第34代校長就任

06 月 関東大会で空手部荻原知佐さん優勝

07 月 全国高校総合文化祭に箏曲部、
書道部森本めぐみさん、文学部田中優香さん出場
NHK杯全国高校放送コンテストに放送部松本優佳さん、
ラジオドラマ部門出場

08 月 インターハイで空手部荻原知佐さん5位、
アーチェリー部団体男女出場
県吹奏楽部コンクールで応援団吹奏楽部金賞

09 月 姉妹校へンリー高校生（オーストラリア）来校
第79回強行遠足実施

10 月 北見北斗高校強行遠足に代表生徒参加
（男女とも1位となる）
創立125周年記念式典
国体でテニス部保坂充彦君ベスト16、
陸上部長田和真君出場

12 月 SELHi 講演会
グラウンド南側防球ネット設置

01 月 SELHi 異文化講座
関東地区高校放送コンクールに
放送部志村夏美さん出場



オーストラリアのへンリー高校生が来校し、
一高生とさまざまな交流をしました。

暦

ばなし

他校との交流

この年は、9月に姉妹校であるへンリー校（オーストラリア）から高校生が来校し、交流しました。10月には、北海道の北見北斗高校の強行遠足に代表生徒が参加し、男女ともに甲府一高の生徒が1位になりました。この交流は現在でも続いていて、3年に1回ずつ交互にそれぞれの学校の強行遠足へ参加しています。

2 学期制開始

2006

平成 18 年度

04 月 2 学期制開始
日本水泳選手権大会に柿沼鈴奈さん出場

07 月 全国高校総合文化祭に書道部小尾彩奈さん出場

08 月 インターハイで空手部荻原知佐さん 3 位、
アーチェリー部団体男女出場
県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部金賞

10 月 第 80 回強行遠足に北見北斗高校代表生徒 4 名参加
創立 126 周年記念式典
県新人大会でテニス部男子団体優勝

01 月 関東地区高校放送コンクールに
放送部志村夏美さん出場

03 月 全県一学区・単独選抜高校入試実施（総合選抜制度廃止）
SELHi 指定終了
「第 80 回強行遠足記念誌」発行



SELHi により語学だけでなく、国際文化についても学びました

02 月 SELHi 全国公開研究発表会

暦

ばなし

英語教育と英語体験

2004 年から始まった SELHi もこの年度が最終年度となりました。1991 年（平成 3 年）に英語科を設置し、英語の教育にそれまで以上に力を注いできた甲府一高ですが、この三年間を通じて生徒の自主的な英語活動や外国人の方々との交流によりさまざまな体験をしました。これから国際社会の中で日本人の英語力がますます試される時代となってきました。一高生がこの体験を通じて英語の必要性や日本の文化について改めて考えるきっかけ作りになったのではないかと思います。



ネイティブの講師による講演会で SELHi 指定も終了となりました

40年ぶりの全県一学区 単独選抜生入学

2007

平成19年度

04 月 全県一学区制一期生入学
45分7校時授業実施
新津元第35代校長就任

05 月 台湾高校視察団来校

06 月 関東大会でアーチェリー部団体8位、
笠井賢君6位

07 月 全国高校総合文化祭に書道部中島望さん出場
NHK杯全国高校放送コンテストに
放送部テレビドキュメント部門出場

08 月 インターハイにテニス部橋爪玲君・
堀内貴仁君ペア2回戦進出、
アーチェリー部団体男女出場
全国高校総合文化祭に箏曲部、
放送部武井亜希子さん出場
県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部金賞

10 月 第81回強行遠足実施
創立127周年記念式典
(同窓会よりワゴン車が寄贈される)
県新人大会でテニス部男子団体優勝



日本文化に触れる台湾高校生

09 月 姉妹校ヘンリー高校生来校



01 月 関東地区高校放送コンクールに
放送部金井正代さん出場

仲間にエール送り続け半世紀余

暦

ばなし

応援団存続の危機

一高応援団存続の危機

山梨県内屈指の伝統を誇る甲府一高応援団が存続の危機を迎えている。現在の二人の団員はいずれも三年生。来春、新入生が入団しなければ団を余儀なくされる。県内で年間を通じて活動する応援団は同校のほか、日川高や甲府工業高などを数校だけ。県高校総体や夏の甲子園山梨大会が開催される際にメンバーを招集する「応援委員会制度」が主流になっている。応援団の衰退は上下関係を嫌ったり、「他人の応援ははからしい」という現代っ子気質が背景に分られるが、甲府一高の団員二人は卒業まで活動を続け、新入生に「伝統」を引き継ぎたいと考えた。



全国高校野球選手権山梨大会2回戦で声援を送る甲府一高応援団一甲府・緑が丘球場(7月19日)

七月、甲府・緑が丘球場で。例年、試合が終わった後に行われ全国高校野球選手権にむかわれる次期団長の紹介が山梨大会、回戦、スタンドに今年行われなかった。甲府一高応援団三人の姿があった。代々受け継がれてきた形を護らし、声を張り上げて。しかし、平賀さんと村松さん

七月、甲府・緑が丘球場で。例年、試合が終わった後に行われ全国高校野球選手権にむかわれる次期団長の紹介が山梨大会、回戦、スタンドに今年行われなかった。甲府一高応援団三人の姿があった。代々受け継がれてきた形を護らし、声を張り上げて。しかし、平賀さんと村松さん

団員は3年生2人 新入生に望みつなぐ

七月、甲府・緑が丘球場で。例年、試合が終わった後に行われ全国高校野球選手権にむかわれる次期団長の紹介が山梨大会、回戦、スタンドに今年行われなかった。甲府一高応援団三人の姿があった。代々受け継がれてきた形を護らし、声を張り上げて。しかし、平賀さんと村松さん

七月、甲府・緑が丘球場で。例年、試合が終わった後に行われ全国高校野球選手権にむかわれる次期団長の紹介が山梨大会、回戦、スタンドに今年行われなかった。甲府一高応援団三人の姿があった。代々受け継がれてきた形を護らし、声を張り上げて。しかし、平賀さんと村松さん



平成19年(2007)年9月23日の山梨日日新聞にこんな記事が掲載された。「一高応援団存続の危機」という見出しのその記事の主旨は、平成19年の時点で団員が2名。いずれも三年生というものだった。甲府一高の応援団と言えば、創部してから半世紀余り。甲府一高出身なら入学してすぐの応援練習は誰もが高校時代の思い出の一つに上げるはず。昭和20年代前半に誕生した一高応援団は県内でも屈指の歴史を持つ。これまでに団長一人という時代もあったが、それでも後輩へと受け継がれ続けてきた応援団。

甲府一高の学生はちよっと違います。長い歴史を受け止めながら、新しい扉を一つずつ開けていく。そんな力を持っている学生なのです。

04 月 55分授業開始

06 月 インターハイ予選でテニス部男子団体優勝
関東大会でアーチェリー部角田まほ莉さん5位、
陸上部常磐春輝君6位、空手部深沢竹蔵君ベスト16

07 月 NHK杯全国高校放送コンテストに
放送部望月奈央さん出場

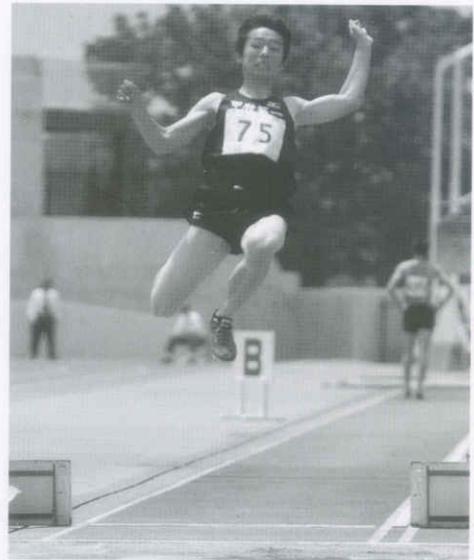
08 月 インターハイでテニス部男子団体2回戦進出、
アーチェリー部塚原昌史君ベスト32、
陸上部常磐春輝君出場、空手部壬生朋宏君出場
全国高校総合文化祭に放送部武井亜希子さん出場、
写真部山口博彰君出場
県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部金賞

10 月 第82回強行遠足実施
男子の終点地を小海とし、男子の距離が73.5kmとなる。
創立128周年記念式典

11 月 県高校芸術文化祭で演劇部最優秀賞、
茶道部・音楽部芸術文化祭賞



県吹奏楽コンサートで金賞受賞した応援団吹奏楽部



関東大会で6位獲得の陸上部の常磐春輝君
その後インターハイにも出場



全国高校総合文化祭に出場した、写真部山口博彰君の作品



インターハイでテニス部男子2回戦進出を果たしました

12 月 沖縄への研修旅行実施

01 月 全国選抜大会にアーチェリー部出場



定期公演『風の送り』



23日、県立文学館講堂
甲府一高演劇部
5年間で休止した甲府一高演劇部が、この秋活動再開した。部員は、演劇部部長、ゼロからの出陣だったが、今日、初めての定期公演『風の送り』が、県立文学館講堂で上演された。観客もあふれていた。

5年ぶりに活動再開
名門復活なるか？

（要約）甲府一高演劇部が5年ぶりに活動再開した。部員は、演劇部部長、ゼロからの出陣だったが、今日、初めての定期公演『風の送り』が、県立文学館講堂で上演された。観客もあふれていた。

暦
ばなし

5年ぶりに活動開始

平成20年（2008）9月19日の山梨新報の文化通信に、5年ぶりに活動再開となった甲府一高演劇部の記事が掲載された。昭和23年（1948）に誕生した一高演劇部は、当時県内で初の高校演劇部として注目された。かつては関東大会に幾度となく出場するなど、山梨県内の高校の中でも屈指の名門校だった。しかし、その後部員が減少し、平成16年（2003）には休部を余儀なくされた。

新聞記事に掲載された年の4月に県内を拠点に活動する劇団・ジラス主宰の砂澤雄一先生が赴任したことが復活のきっかけとなった。授業の中で一高の演劇部の歴史を紹介したことから、当時英語科の2年生だった声沢実彩さんが「伝統を復活させたい」と砂澤先生に顧問就任を直談判し、活動を再開した。その後、平成21年（2009）の3月に3年生が卒業し、12人いた部員は2人になってしまった。しかし、2人の部員は二人芝居で関東大会出場を果たしている。練習はランニング、ストレッチ、演劇用のエクササイズ、ダンス、発声練習などたっぷり1時間をかけて行われる。運動部並みにハードなトレーニング。日々の努力が、伝統の演劇部を存続させるための力となっている。

04 月 跡部和第36代校長就任
学力向上 F21 プロジェクト開始

05 月 県総合体育大会でテニス部男子団体優勝
学校別成績で男子総合9位
応援団吹奏楽部第50回定期演奏会

06 月 関東大会でアーチェリー部
八巻絵梨佳さん7位

09 月 創立130周年記念事業として、
自習室完成

11 月 関東選抜大会でアーチェリー部
八巻絵梨佳さん3位
県高校芸術文化祭で演劇部最優秀賞
創立130周年記念事業として、
新マイクロバス納車

12 月 関東選抜大会で
テニス部男子10位

01 月 関東地区高校放送コンクールで
放送部石原くるみさん優秀賞、
剣持紀秀君出場



08 月 インターハイで山岳部男子15位、
アーチェリー部男女出場
全国高校芸術文化祭に音楽部、
写真部輿水万里さん出場
県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部銀賞

10 月 第83回強行遠足実施
創立129周年記念式典
県新人大会でテニス部男子団体優勝



03 月 フーバー高校(アイオワ州)との
合同音楽祭開催
全国選抜大会にテニス部男子出場

9月に進路指導室横の自習室が完成しました。完成以降、生徒の勉強ぶりを間近に見てきた進路指導主事の望月祐子先生は、その頃を振り返って次のように語っています。「自習室の完成直後から、3年生が積極的に活用してくれました。平日は早朝や放課後遅くまで、休日も一日中学習する

生徒が見受けられました。下級生も上級生の勉強ぶりに刺激を受けていたようです。21年度も東京大学や京都大学を始めとする国公立大学、慶応大学や早稲田大学などの難関私立大学に多数の生徒が合格できました。下級生も自習室をどんどん利用し先輩の後に続いてほしいと思います。」

甲府一の山本大喜主将が宣誓

息



選手宣誓をする
甲府一の山本大
喜主将＝小瀬

「今までへの感謝の思い込めた」

甲府一の山本大喜主将が「最高の仲間と共に最高の夏にすることを誓います」と選手宣誓した。

「みんなの代表として、緊張したが、気持ちをすべて出し切ることが出来た」

宣誓の中で一番強調したかったのは、「感謝の気持ちと野球への思い」だった。これまで野球を続けてきたなかで、多くの人に世話になったからだという。

朝、チームの仲間から「頑張っ

てこい」と送り出された。途中で言葉に詰まるのでは、と心配する声もあったが、「自分では100点満点の出来だった」と笑顔を見せた。

甲府一は12日、富士北麓球場で白根と対戦する。

「今までたくさんの人に支えられながら日々練習をしてきた。その感謝の思いを（試合の）一球一球に込めていく。これまでの集大成として、野球人生のすべてをこの大会に出し切りたい」と決意を語った。

平成21年（2009）7月12日の新聞各社の紙面には、前日小瀬球場で開会式が行われた高校野球山梨予選大会の様子が掲載されていた。この年、選手宣誓を務めたのは甲府一高野球部主将の山本大喜君。選手宣誓を決めるクジを引いた時に「当たる予感がした」という山本君。「今まで支えてくれた人への感謝の気持ちと、私たちの野球への思いの全てを一球一球に込め、この夏を最高の仲間とともに最高の夏にすることを誓います」と宣誓した。

この言葉の中にある「感謝の気持ちと野球への思い」は全ての野球少年たちの思いに通じる。子どもの頃から野球を続けてきた少年たちは、野球を続ける中で多くのことを学ぶ。多くの野球少年たちが目指す甲子園への道。夢の舞台へ近づくために、計り知れないほどの努力を続けてきた。そして、晴れの日。山本君を始め、一高の野球部員、その日小瀬球場に立った全ての野球少年たちは、山本君の宣誓の言葉の中に自分のこれまでの野球人生を重ね合わせ、支えてくれた多くの人のことを思い出したはずだ。本誌の19ページに掲載した一枚。練習が終わったグラウンドへ一礼をする野球部員の姿には、まさに感謝の気持ちと野球への思いが込められている。

04 月 55分授業・ユニット制時間割を実施
甲府一高ホームページをリニューアル

06 月 夏のオプション服として、
ポロシャツとスカートを導入
関東大会でテニス部男子団体ベスト16、
秋山大地君・桐原峻君ペアベスト8、
陸上部深沢翔基君ハンマー投げ6位、
アーチェリー部八巻絵梨佳さん7位
UTY教育美術展で美術部末木美那さん
開局40周年記念特別賞を受賞

07 月 NHK杯全国高校放送コンテストに
放送部石原くるみさんテレビドラマ部門出場



特別賞を受賞した美術部の末木美那さんの作品



テニス部ペアでベスト8入りした秋山大地君と桐原峻君



文学部として全国高校総合文化祭に出場した宮澤霞さん

08 月 インターハイにテニス部秋山大地君・桐原峻君ペア出場、
陸上部深沢翔基君出場、
アーチェリー部団体男女出場
全国高校総合文化祭に美術部浦川彰太君、
末木美那さん出場
文学部宮澤霞さん出場
県吹奏楽コンクールで応援団吹奏楽部金賞

10 月 第84回強行遠足（北見北斗高校生参加）実施
創立130周年記念式典・記念演奏会

11 月 関東高等学校駅伝競走大会に陸上部男子出場
関東選抜大会でアーチェリー部
八巻絵梨佳さん第2位

12 月 関東甲信越ブロック英語暗唱弁論大会に
荻野奈緒子さん出場
関東選抜大会にテニス部男女団体出場
文化庁高校生交流事業（韓国派遣）に美術部8名参加



暦

ばなし

新しい制服と、女子生徒自治会長と。

創立130周年を迎えた平成22年(2010)の夏、甲府一高にまた新しい歴史が加わった。それは、制服。これまで甲府一高の女子生徒の制服といえば、開衿シャツに吊りのスカート。多くの同窓生がこの一高スタイルを経験してきた。ある60代のOGのお話によると、「当時、甲府二高(現甲府西高校)や英和高校のセーラー服がとても可愛く見えました。一高といったら、吊りスカート。夏はとても暑かったのを覚えています」。ここ数年の夏の暑さは尋常ではない。そこで、多くの生徒から夏の制服を見直そうという意見が出、生徒自治会がとりまとめ学校へ要望した。まず最初上がったのが、女子のスカート。ここ数年、中学生が高校を選ぶ理由の一つに制服の可愛さがあるという。そこで、これまでの吊りスカートに、チェック柄のプリーツスカート、紺色のプリーツスカートを追加し、どれを着用してもよいということにした。さらに、暑さを少しでも和らげるため、ワイシャツも夏の間は白のポロシャツ着用を許可。一高始まって以来の大きな制服革命が起こったのだ。生徒自治会長の古屋ゆいさんは、「伝統を受け継ぎながらも、新しい時代へと向かっていく。そんな一歩を踏み出したい」と抱負を語っている。

一高の同窓会の中には女性が発足した「一紅会」がある。当時の凛とした一高女子の精神は、これからもずっと受け継がれていくのだろうか。

創立 130 周年記念式典 演奏会・記念祝賀会

平成 22 年（2010）10 月 22 日（金）に山梨県民文化ホールにおいて、
創立 130 周年記念式典が行われました。

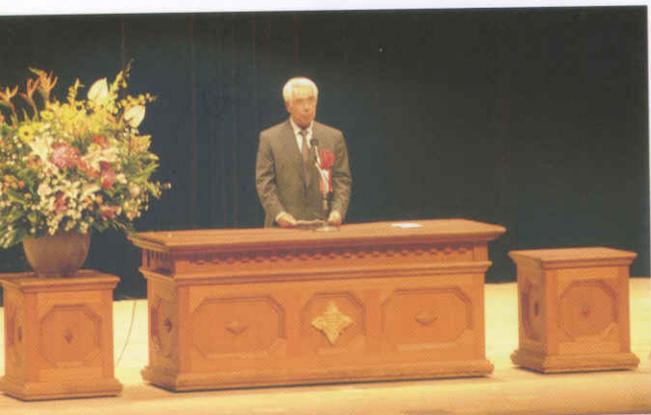
当日は在校生、同窓生、来賓、保護者など多くの方々が出席し、
130 周年という長い歴史を振り返るとともに、未来へつながる一步を確認しました。

前半は記念式典、後半は演奏会を開催。

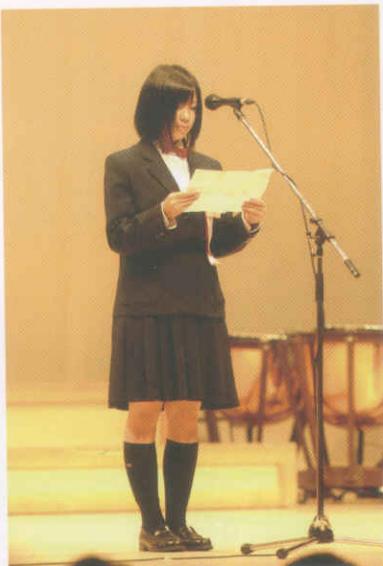
演奏会では、同窓生のドラマーの森山威男さんと現役吹奏楽部とのセッションという夢の共演が実現。

会場を大いに盛り上げてくれました。





記念式典の様子



アビオで行われた記念祝賀会



演奏会の様子

創立130周年記念事業

創立130周年という大きな節目に当たる本年、
学校、PTA、同窓会の三者で「創立130周年記念事業協賛会」を組織し、
「生徒に夢を与えるソフトな記念事業」を実施しました。

生徒の活動をサポートする
マイクロバス（29人乗り）を購入しました。

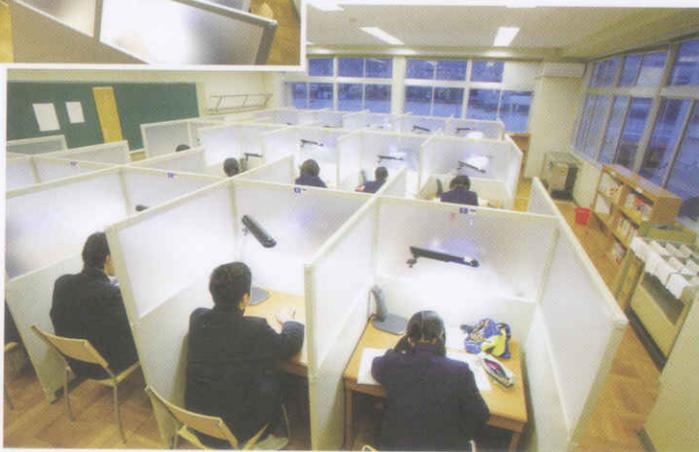
マイクロバスの寄贈



01



02



自習室の完成

学力と進学実績の向上を目的にした
「自習室」が完成しました。
学習用ブースやエアコン・防音設備が設置され、
生徒の評判も上々です。



03 日新基金

記念事業の一環として新たに設けられた日新基金は、ソフト面への援助です。「個性的で創造性に富み、卓越した指導力を持つ生徒」の育成のための基金であり、生徒自身が考えた企画に対して経済的支援を行い、生徒の夢や希望の実現を後押しするものです。第1回目の今年は、アメリカのワシントンDCにある国際通貨基金（IMF）本部、世界銀行などを3名の生徒が視察することになっています。

IMFプロジェクトについては、本校OBで現在、IMF副専務理事の篠原尚之さん（81ページに寄稿文掲載）に多大なお力添えをいただきました。一高生の夢のため、明日への一歩のため、この日新基金は平成22年度から5年間実施されます。

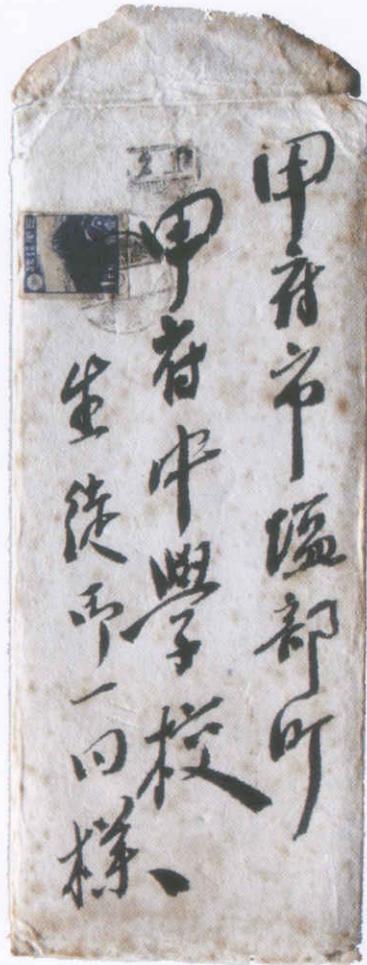
IMFプロジェクトに参加する3名
 小林大起君
 若尾 萌さん
 森本菜月さん

04 資料展示

これまで甲府一高は、日本はもとより世界で活躍する卒業生を多く排出してきました。今回、創立130周年を記念して、未来を担う一高生の向上心や豊かな人間性、母校愛を育むことを目的に、諸先輩方が築き上げてきた業績などを顕彰し、校舎一階にある視聴覚内外に資料を展示しました。



石橋湛山
母校の後輩への手紙



お尋ねの通り、
この状紙をお見
し下さい。P.S. 1
Condition of the
はクラーク博士の
訓書として私が
昔甲府中學校に
大崎正健校長ら
と一うらなふ事あり
自分の産卵の銀
とありの事ありませ
るので文字は拙い
が之を記して是に
上げたいので併し
此の語の真意を
何事ともせん
まことなりと思
強く努力して
石の上も三年
とある。川崎の
まことなりと

昭和23年（1948）1月31日付で石橋湛山が甲府中学校の生徒にあてた手紙が、昨秋甲府一高関係者により発見され、甲府一高に寄贈された。甲府一高創立130周年記念事業のひとつである資料展示コーナーにそのレプリカが展示され、新聞・テレビにも取り上げられた。

手紙が書かれた事情を知るために湛山に關する数点の資料にあたつて見て、湛山は日本近代史上にそびえたつ名峰であることを今更ながら実感した。ちなみに湛山が「政治的良心に従います」の書簡を出し総理大臣を潔く辞した6ヶ月後の57年10月に早くも、辞任を惜しむ各界著名人の声を集めた「名峰 湛山」が出版されている。

湛山は戦前暴走する軍部に異を唱えた言論人として活躍し、戦後政界に転じた。終戦直後「更生日本の針路」の論文によつて日本とのべき指針を明確に指し示し、46年5月大蔵大臣に就任して、いわゆる「石橋財政」によつて後の「高度経済成長」につながる、経済復興、国家再建の根幹を築くことに心血を注いだ。大臣在任中の46年9月湛山が母校を訪ね、「クランク先生について」の講演をした折学校は湛山に書の揮毫を懇請した。湛山が47年8月に揮毫を贈ったことに対し、翌48年、生徒の代表が当時の近藤校長が年賀の挨拶とともに、贈呈についての謝意を送つたものと推察される。書簡はそれに対する返書である。

湛山は大蔵大臣として戦後経済復興を強力に進める過程で、戦時補償債務打ち切り問題、

拝啓 新年勿々の御状難有拝見

しましたBoys be

Ambitiousの三語

はクランク博士の

訓言として私が

昔甲府中学にて

大嶋正健校長から

教へられ来窃に

自分の座右の銘

としたものであります

ので文字は拙い

が之を記して差

上げたのです 併し

此の語の裏には

何ごとにまれ志を

立てたなら忍耐

強く努力せよ

石の上にも三年

と云ふ訓辭の含

まれてゐることを

見落してはなり

ません 幸に御

手紙にはこの趣

意が善く理解

されてゐることが現

れてゐますので誠に

嬉しく存じました

益々御勉強下され

んことを祈つてやみ

ません 私も老年な

がら諸君に負けず

勉強するつもりです

旅行等の為め遅

延しましたが 以上

ご挨拶まで 敬具

昭和二十三年 一月三十一日

石橋湛山
甲府中学校
生徒一同様
昭和二十三年
一月三十一日

湛山先生から甲府中学生徒一同への手紙 原本

石橋湛山 母校の後輩への手紙

石炭増産問題、進駐軍経費問題などでGHQ（占領軍最高司令部）と鋭く対立した。

進駐軍経費は賠償費として日本が負担しており、駐留軍人のゴルフ場、邸宅建設、贅沢品などの経費まで含んでいて、日本の国家予算の3分の1を占めていた。当時日本は戦禍が至る所に残り、食料も住宅も衣料も何もかも不足していた。600万前後の失業者、630万に及ぶ海外邦人・軍人の引き揚げ、戦災孤児、戦争寡婦、統制品・隠匿物資の横流し、闇取引の横行など最悪の状況であった。47年に筆者は小学校に入學したが、空襲により校舎は消失していて、焼け残った隣りの小学校に通学した。そうした状況下での限度を越えた巨額の負担の軽減を、湛山は堂々と要求し、GHQも占領政策の円滑化や諸外国の評価などを考慮し、日本の負担額を2割ほど削減した。戦時の軍部の暴圧はさりながら、敗戦直後の占領軍の威圧力は今日では想像できぬ強大なものであった。湛山は、感情的、イデオロギー的ではなく、具体的な事例と数字を挙げ、情理を尽くして占領軍を説得した。しかし湛山は占領軍との齟齬によりアメリカの不興を買い、あるうことか戦時中に軍国主義を鼓吹したという事実無根の理由で47年5月、GHQから公職追放の処分を受け、51年まで政界から退けられた。

時流に流されずどんな圧力にも怯まず骨太の平和主義、自由主義を貫いた日本近代史上最高の言論人ともいわれる湛山がこのいわれない処分に對してどのような心境でおられたか察して

余りある。作家江宮隆之は前述の書簡中の名文句を題名とする自著の中で「湛山の両目からは血涙が出るのではないかと思うほどの憤りがあった」と表現している。湛山は公職追放の前後要人との打ち合わせ、質問書・抗議文・弁駁書の作成、GHQ高官との会見などで多忙を極めているが、母校生徒への約束を忘れず、書を揮毫し、贈呈している。公職追放後も湛山は決して泣き寝入りせず、アメリカ政府・議会要人への書簡送付、「ニューズ・ウィーク」・「ニューヨーク・タイムズ」など米ジャーナリズムへの投稿など抵抗を続けている。アメリカの言論機関や良心的知識人もこれを取り上げ、GHQの対日政策への批判も現れることになった。「ニューヨーク・タイムズ」は「日本においてマッカーサーの横面を張った唯一の男」という見出しをつけて湛山について論評したという。母校への手紙の内容はクラーク博士の「Boys, be Ambitious」に触れ、志を立てて忍耐強く努力することの大切さを説き、自らも母校の後輩たちに負けないよう勉強する決意を示している。

湛山は手紙の中で中学生たちに語りかけたように、生涯最大の窮地・逆境のさなか、忍耐強く志を持ち続け、やがて政界に復帰し、通商産業大臣、内閣総理大臣に就任。その後も日中・日ソの国交回復・関係改善の土台を築き、冷戦構造を打ち破らんと奔走し、国際平和に大きく貢献するのである。

未来への扉

高校生の時、
どんな夢を描いていたのだろう。
あの時、
自分は何に向かって進んでいたのだろう。
甲府一高同窓生4名の方から
寄稿文を寄せていただきました。
言葉の一つひとつに、
甲府一高生たる思いが詰まっています。



森山威男（昭和38年卒業）

ブラスバンド部でドラムを始める。東京芸術大学打楽器科卒業。大学時代より、山下洋輔とトリオを結成。第27回南里文雄賞、第35回ジャズディスク大賞。ジャズ界のカリスマ的存在として活躍中。

「創立130周年の甲府第一高等学校に感謝します」

甲府第一高等学校の入学は夢の実現への第一歩でした。なぜなら、合格すれば、東京の大学へ行かせてもらえるからです。他の人と競争をするのが嫌いな私でしたが、受験に目標を置いた自分との戦いには楽しみを見出しました。

ところが、楽しいはずの高校生活も、音楽や演劇の世界に憧れていた私には何の意味もなく、つまらないものでした。ただ、部活のブラスバンドだけが唯一の楽しみでした。いわば、ブラスバンド練習のためだけに学校に行っていたようなものでした。ブラスバンドの先輩は親切に教えてくれ、家に招待し、ジャズのレコードを聴かせてくださいました。仲間とは何でも話し合える、兄弟以上の付き合いでした。今でも私の心の中でこの関係は変わることはありません。

音楽の金子先生の計らいで東京芸大を目指すことができたのは何よりも嬉しいことでした。高校受験と同じように、また自分との戦いが始まりました。1秒間に左手だけで4回を、7回

叩けるようになりました。その年、芸大打楽器合格者の3人の中に私もいました。

今思うと、高校時代は「さなぎ」のような時代です。破ることのできない蓑でがんじがらめにされて、どうあがいても自由になれません。その中でいろいろなことを考えます。「どうして成績だけで人を判断するんだ」とか「自分の努力を誰も認めてくれない」とか「自分の良いところを誰も褒めてくれない」とか。そしてなんとかそこから出たいと思います。でも無理です。

だって「さなぎ」だから。蓑の中の「本当の自分」を見てもらえることなどないのです。でもがっかりしないでください。明日には、美しい羽を広げて大空に必ず飛び立つのですから。その時、美しい蝶のあなたには「さなぎ」の面影はどこにもありません。

それまでほんの少しの間、蓑の中で自分について考え、将来を夢に見、飛び立つための力を蓄えるのです。



中村和夫（昭和40年卒業）

昭和44年京都大学薬学部を卒業。大学卒業と同時に製薬大手、三共（現第一三共）に入社。プロジェクトリーダーを務めた高脂血症治療剤「メバロチン」が空前のヒット。平成4年4月シミック株式会社社長に就任し、現在は会長兼社長。

光る個性を育む時代

昨今ではアイデンティティの大切さが謳われていますが、私のそれは高校時代に確立したと言って過言ではありません。地方の高校生の方で鼻っ柱が強いと思われるかもしれませんが、熱い情熱を持つ仲間たちと天下国家を論じ合い、日本の将来を真剣に考えていました。そのような高校生活の中で多くの級友たちがそれぞれの興味を追究し、自らの専門分野を見極めていきましたが、私の場合は化学の分野に惹かれていきました。

私は幼少時より化学が好きで、自宅の庭に掘建て小屋の「化学実験室」をつくってもらい、

物質の化学反応を見て楽しんでいました。ほとんどが失敗でしたが、模型のロケットや低翼のエンジン飛行機などは実際に飛行するものもあり、小学生にしてはなかなかの出来ばえだったと我ながら感心しています。高校でも化学部に所属し、色々な化学物質を混ぜ合わせてジュースの素や香水を作っては級友に振る舞っていました。所詮は子供の実験なので級友たちにはあまり喜ばれてはいなかったと思います。当の本人は新しいものを作り出した喜びを他人にも分かっていたほしい一心で日夜実験に励んでいました。大学、就職も迷わずその方向に進み、今は医薬品関連の会社を経営しています。

甲府一高の級友はそれぞれの分野で専門を極めていく人が多く、高校生の時に行った「日本が、社会がこの先どうあるべきか」という白熱した議論が、各人の中で生きているのではないかと思います。私も同様で、「社会にとって必要なものか」を自問自答しながら仕事をし、今まで一度たりともその軸がぶれることはありませんでした。もちろん、葛藤や迷いに直面したことはありませんが、多感な高校時代に熱く語りあったものは私の心に深く定着し、ゆるぎない信念となってその後の生き方

に影響しました。「社会にとって」という大きな視点を共有しながら、それぞれの専門分野で活躍する級友との議論は今でも楽しくて仕方ありません。まさに、個性と個性のぶつかり合いで、内容は四十年以上経った今も当時のように熱を帯びています。

国際化が飛躍的に進む現代社会において、アイデンティティを築くことの重要性がますます高まっています。国際人として必要な教育とは何かを考えたとき、学業はもちろんのこと、社会にどのように関わりを持つてきたか、どのようにリーダーシップを養ってきたかが問われているのだと思います。ボランティアやアルバイト、スポーツや文化活動などの活動もやはりアイデンティティの形成につながるでしょう。そして何より、高い志を持つ友人との相互に刺激し合う交友関係は、多様なものの見方や考え方を醸成させ、アイデンティティの形成の格好の機会となります。

在校生の皆さんには、小さくまとまらずに大きな夢と希望を胸に、色々な活動に果敢に挑戦し、充実した高校生活を送ってほしいと期待しています。



藤井孝藏（昭和45年卒業）

昭和49年東京大学工学部航空学科卒、昭和52年東京大学大学院工学系研究科航空学専修修士課程修了、昭和55年東京大学大学院工学系研究科航空学専修博士課程修了、工学博士。現在、宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 副所長

高校生活の思い出と今

— 今の時代を生きる高校生のみなさんに

ご存じの方も多いと思います。2010年6月、小惑星探査機「はやぶさ」は60億キロメートルの旅路を終えて地球に帰還、小惑星の貴重なサンプルを積んだカプセルを分離した後、自身は燃え尽き、使命を全うしました。小惑星は遥か彼方にあり、地球からの指令を探査機が受け取るのは数十分後です。このような状況下では、地球からの指示を最低限にし、探査機自身が自ら判断して行動する探査機の「自律」が必要です。

私が高校生だった1960年代の甲府一高では、生徒の「自律」が学校全体で尊重されていました。一例として、「制帽廃止」があります。今の若い方には想像できないでしょうが、制服、制帽は当時の高校では当たり前でした。大学でも、いわゆる「詰め襟」（わからないかな？）の学生が多数いた時代です。時代は変化しつつあり、帽子をかぶって登下校するという習慣にみなが疑問をもちました。生徒会が学校に提案、

結局「校則」の改正という形で制帽の義務はなくなりました。甲府一高には、そんな生徒会の自律的判断を尊重する姿がありました。生徒も、はめを外すことはあっても自分たちなりの原理原則は守っていたと思います。甲府一高にはこれからもそんな高校であり続けて欲しいと願っています。

今、リスクを恐れる余り、新しいこと、難しいことは避けて通るのが得策のように言われています。数年前にある大学を訪れた際に近所の古道具屋で見つけた「Wish it Dream it Do it」という古看板が、私の部屋に飾ってあります。

みなさんには、世の中の「当たり前」に疑問を持ち、いい意味の放埒さを忘れず、いろんなことにチャレンジして欲しいと思います。探査機「はやぶさ」はそんなことを教えてくれたのかもしれない。



篠原尚之（昭和46年卒業）

昭和50年、東京大学経済学部卒業後、大蔵省（後の財務省）入省。昭和54年、プリンストン大学ウッドロー・ウィルソン・スクール修士課程修了。現在、国際通貨基金副専務理事。

日新基金プロジェクトに寄せて

国際通貨基金（IMF）で副専務理事として働き始めて、一年近くが過ぎた。世界経済が好調だった数年前には、IMF不要論まで出ていたが、昨年のギリシャ・アイルランド問題等のソブリン危機への支援に代表されるように、最近のIMFは注目度を高め、忙しく仕事させて頂いている。まだ暫くは落ち着いたくない経済状況が続きそうである。

IMFは、アメリカ（ワシントン）にある国際機関で、スタッフは三千人弱。欧米人が多く、日本人は四十人強である。私のボス（専務理事）はストロスカーンというフランス人、二人の同僚はアメリカ人とブラジル人、私の

補佐官はジャマイカ人、秘書はフィリピン人である。私の担当する分野の局長さんは、インド人、イギリス人、ニュージーランド人など。様々な英語が飛び交い、様々な論理が入り乱れる不思議な組織である。

振り返ってみると、私が最初に外国人から話しかけられた時の記憶は鮮明である。甲府一高在学中の夏休みのときだったと思う。初めて新幹線に乗って大阪万博に向かう車内だった。私の着ていたTシャツにプリントされていた英語にその外国人夫婦が反応して、私に何か親しうに話しかけてきた。私は、当然何を言われたのか分からず、すぐ退散した。

私は帰国子女ではなく、甲府市で中小企業を経営していた親の息子である。初めて外国旅行したのは大学4年の時であった。外国と本格的に触れるようになったのは、勤務先（大蔵省）から留学に派遣されたからであり、基本的に語学が得意ではない。従って、IMFという国際機関で、優秀な外国人エコノミスト達に囲まれていること自体に時々違和感を覚えながら、仕事をしている状況である。

ワシントンに住むのは今回二回目であるが、この国は大変面白い。少し雪が降っただけでよく停電するし、道路はでこぼこ、地下鉄は二十

数年前のままで遅延がざらで、エスカレーターなどもよく壊れる。食事も不味い。貧富の差もあり、競争も激しい。日本のなんと平和で居心地の良いことか。しかし、世界中からアメリカの大学や研究機関に人が集まり、次々と革新的な企業やアイデアが生まれ、その自由で民主的で活力に溢れた社会環境に憧れが集まる。アメリカの強みは、国民の民族的・文化的多様性によって、世界各国と繋がっていることだと言われる。多様性が新たな考え方や活力を吸収し、グローバルな普遍性を生み出していく。

日本は、「第三の開国」に取り組むという。しかし、そこで語られているのは、現状を維持しながら何とか小さく生き延びようとしている姿のように見える。本来「開国」とは、創造的破壊なのだろう。日本の社会が異なった人間や習慣と直接接する機会を飛躍的に増やさないと、世界のグローバル化という巨大な流れに飲み込まれるだけではないかと危惧される。

日新基金プロジェクトでワシントンを訪問される皆さんには、わずかな期間ではあるが、アメリカ、そしてIMFや世界銀行という国際機関の一端を見てもらい、少しでも何か自分なりの記憶を残してもらえれば幸いである。

歴代同窓会長

初代	山本保	11代	矢崎茂三郎
2代	松谷緑郎	12代	清水八束
3代	深沢議一	13代	高遠啓一
4代	深沢平重	14代	飯島哲
5代	島田盛平	15代	相川義仁
6代	飯島豊甫	16代	太田源一郎
7代	新海栄治	17代	海沼昭
8代	芦沢留次郎	18代	井上雅雄
9代	小野熊平	19代	飯田祥雄
10代	寺田七男	20代	望月操三
		21代	望月政男

歴代PTA会長

昭和23年度	寺田七男	昭和44年度	篠原方泰	平成2年度	小澤照洋
昭和24年度	寺田七男	昭和45年度	矢崎実	平成3年度	古屋力
昭和25年度	寺田七男	昭和46年度	小田切順三	平成4年度	中村信雄
昭和26年度	露木寛	昭和47年度	石原博雄	平成5年度	田中正喜
昭和27年度	名取忠彦	昭和48年度	相川義仁	平成6年度	小林聰一郎
昭和28年度	名取忠彦	昭和49年度	加賀美一三男	平成7年度	酒井昌男
昭和29年度	平井一満	昭和50年度	海沼昭	平成8年度	遠藤順彦
昭和30年度	許山整	昭和51年度	上原美好	平成9年度	輿水孝樹
昭和31年度	大石利雄	昭和52年度	大塚篤郎	平成10年度	土橋博司
昭和32年度	米沢良和	昭和53年度	遠藤周次	平成11年度	原経光
昭和33年度	小野熊平	昭和54年度	笠井忠文	平成12年度	功刀利一
昭和34年度	篠原良雄	昭和55年度	広瀬昇	平成13年度	安江一
昭和35年度	高野孫左衛門	昭和56年度	橘田正彦	平成14年度	皆川巖
昭和36年度	小田切彰	昭和57年度	山本栄彦	平成15年度	関徳明
昭和37年度	許山整	昭和58年度	渡辺守人	平成16年度	定月直樹
昭和38年度	鷹野慶次郎	昭和59年度	小川貢生	平成17年度	大久保広行
昭和39年度	佐々木秀春	昭和60年度	保坂哲朗	平成18年度	武内有二
昭和40年度	飯島哲	昭和61年度	入倉吟二	平成19年度	古屋裕一
昭和41年度	小野熊平	昭和62年度	望月政男	平成20年度	齋藤義一
昭和42年度	佐藤森蔵	昭和63年度	岡島泰三	平成21年度	西山正盛
昭和43年度	原忠三	平成1年度	高野洋志雄	平成22年度	佐藤茂樹

創立 130 周年記念事業協賛会役員

会 長	望月 政男	同窓会会長
副会長	齋藤 義一 / 西山 正盛 / 佐藤 茂樹 小田切 常雄 飯島 善一郎 赤池 亨 / 高橋 博之	P T A 会長 同窓会副会長 東京同窓会副会長 教頭
役 員	溝口 秀男 / 茂手木 寛 / 雨宮 年江 水村 勝 / 古屋 裕一 / 雨宮 俊彦 丸茂 中 / 藤嶋 眞美子 / 榎窪 一浩 長田 浩一 / 鷹野 一雄 依田 訓彦 田中 茂樹 戸栗 敏 / 金丸 信吾 / 大久保 広行 大西 勉 宮下 仁 / 河澄 芳男 堀之内 秀一 / 露木 和雄 加藤 忍 / 雨宮 絹枝 野澤 俊英	同窓会副会長 P T A 副会長 同窓会庶務 同窓会会計 同窓会監事 同窓会事務局長 教頭 事務長 総務主任 総務副主任

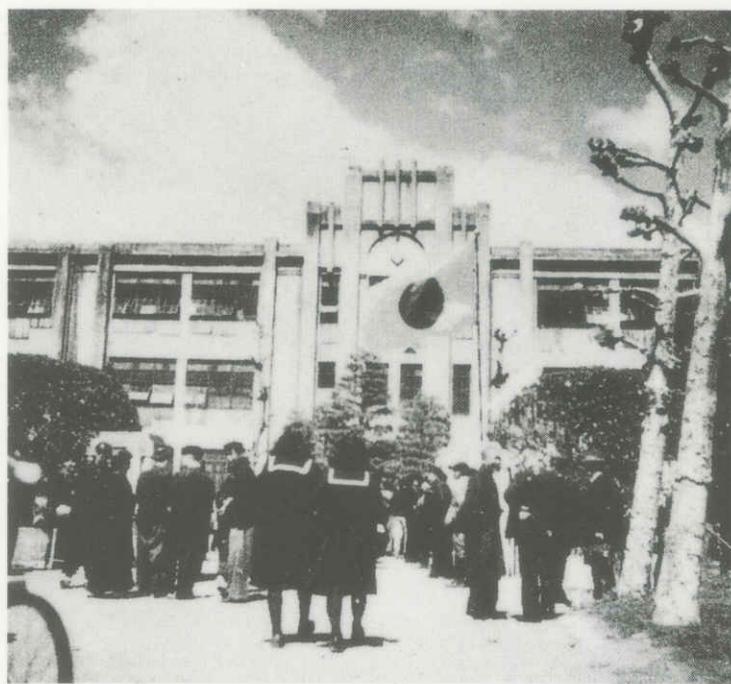
記念誌編集委員

編集委員長 高橋博之

委 員 依田訓彦(同窓会) 水村 勝(同窓会) 大西 勉(同窓会事務局長)
鷹野一雄 (PTA) 依田 源 加藤 忍 雨宮絹枝 野澤俊英
石田泰道 井上正子 齊藤正敏 日野原雪子 堀口秀樹 望月靖公
大久保雅司 中島奈美

甲府第一高等学校創立 130 周年記念誌 「学ぶ系譜、紡ぐ」

発行日	2011年3月1日	編集・制作	創立130周年記念誌編集委員会	写真提供	保阪康夫氏 (28~29ページ)
発行	山梨県立甲府第一高等学校 創立130周年記念誌編集委員会 山梨県甲府市美咲2丁目13-44		cocochi		飯田秀實氏 (32~33ページ)
		編集・文	雨宮千春		鈴木和仰氏 (40ページ)
		デザイン	保坂紀明		
		写 真	山本剛士	印 刷	株式会社少國民社 山梨県甲府市丸の内2-7-24



昭和25年入学式当日（この年から全日制が共学になる）